
彼女の恋愛事情 2 ～麻由の場合～

丹嶋文絵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼女の恋愛事情2 ～麻由の場合～

【Nコード】

N9872F

【作者名】

丹嶋文絵

【あらすじ】

麻由^{まゆ}、25歳。職業英語教師。男に声をかけられること多数。生徒からは“麻由ちゃん先生”なんて呼ばれてる、外見はとびつきりかわいい彼女だけど、本当は……。『暁の場合』に登場した、麻由の恋物語です。独立した話にはなりますが、『暁の場合』のネタバレがかなりありますので、ご注意下さい。

プロローグ

よくさ、‘ギャップ’に惹かれるっていう奴いるじゃない？

ほら、しっかりしてそうな女の人に実は結構弱いところがあったりとか。バリバリのキャリアウーマンがものすごく家庭的な人だったりとか。

ギャップでモテる！なあって書いてある雑誌の記事もあるしさ。

そういうの、わからないでもないんだけど。

でも。

「そのギャップがいいんだよね」

……そう言った、そのあんだ。

あんたに教えてやりたいことがある。

ギャップっていうのはね。

あっていい人間と……あってはいけない人間がいるのよ。

「麻由ちゃんって、ほんっとかわいいよね」

最近あたしに一生懸命自分アピールしてるエリート銀行マンが、
そう言う。

うん、知ってる。あたしはかわいいよ。

「えー？そうですかあ？そんなことないと思うけどなあ……？でも、
もとはし本橋さんみたいにかっこいい人にそう言ってもらえるなんて、すっ
ごくうれしいな」

ニツコリ、ってね。

内心思ってることなんて、ひとつも出さずに笑顔で謙遜。

そんなあたしに、本橋というお坊ちゃまは、

「はは、そう？……麻由ちゃんが喜んでくれるなら、いくらでも言
うよ？」

そう言って、少し長めに伸ばした髪を左手でかきあげた。

自分がかっこいいことを十分に理解した上で、計算された動きだ。

……そうだね。その見せびらかせてる金ピカの趣味悪い時計と指
輪、それさえなければ、いい男かもね。

顔だけ、だけど。

カップルに今大人気っていう高級イタリアンに舌鼓を打ちつつ、目の前には、この前友人に紹介された、趣味は悪いけど高い時計とアクセサリー、高級ブランドスーツで身を固めた、見た目のいい男。まあ、ぼちぼちの好条件。

……でもなあ。

こいつ、あたしのこともなんかの装飾品と一緒にしか考えてないんだろうなと思う。連れて歩くのに、知り合いに見せるのに、我慢できる彼女。それが欲しいんだろうって。

それが、丸わかりなんだよね。

……まあ、条件重視で相手選んでるあたしに言われたくないかもだけど。

そんなこと考えながら、適当に相槌を打っていたら、本橋がスツトリボンの巻かれた箱を取りだした。

「——かわいい麻由ちゃんに。君に似合いそうなのを見つけたから、これ」

そう言ってテーブルを滑ってきたのは、少し細くて長めの箱。

うん？このサイズは、ブレスレットかな？

「え……でも……」

こんなの頂けませんと、頂いたら見返りを求められるんじゃないかって、そういう気持ちににじませながら、困ったように箱には手をつけずに、本橋の顔を上目遣いに見上げる。

案の定、本橋は余裕の笑みで、ニツコリと笑った。気取って。

「いいから。それを受け取ったからって、君をどうこうするつもりはないし、押し付けがましい態度を取るつもりもないよ。ただ、これを見た瞬間、君にっと思ってしまうって……。つい、そのまま買ってしまったんだ。恥ずかしいけどね」

本橋が照れたようにかすかに笑う。

へえ。なかなかの名演技じゃない。

……でも、そういうのはさ、何にもわからないお嬢さん相手にしなきゃね？

こちらら自分を演じ続けて、そろそろ数えるのも嫌になるくらいの年数経ってんのよ？ そんなのに今更騙されますかっての。

「ほんとにいいんですか？ 頂いて……」

「もちろん。受け取ってもらわなきゃ、僕が困るよ。……せつかくだし、開けてみて？」

笑みを崩すことのない本橋の言葉に、ゆっくりと箱に手を伸ばした。

リボンの巻かれた真っ白な箱を空けると、さらにベルベットの箱

が入っていて、それを少しスライドさせるように開ければ、プラチナの、二連になった華奢なチェーンブレスレットが入っていた。

……あらあゝ？絶対金ピカが出てくると思ったのに。

「うわあゝ！すごきれい！これ、ほんとに頂いてもいいんですか？」

ブレスレットを取り出して、目を輝かせた（ように見えるだろう）あたしに、本橋は思惑通りと言わんばかりの笑みを浮かべた。

「そんなに気に入ったなら、つけてみたら？」

「はい！」

本橋の言う通りに、今しているブレスレットを箱におさめて、代わりにそのチェーンブレスレットをつける。

「……どう、ですか？」

「うん、よく似合ってるよ……まるで君のために作られたみたいだ」

うわゝ、^{キザ}気障だねえ。

……ちよつと寒イボ出ちゃったし。

「もお、本橋さんったら……。でも、ありがとうございます。大事に、しますね」

ニコって、かわいく笑っておく。

まあね。これは確かにきれいだし。ブレスレットに罪はないし。

…………でもね。

おかしくない？

ゴールド大好きなあんたが、これを選ぶわけがないじゃない？

それにこういうシンプルなデザインって、あたしみたいなかわいい系のタイプより、大人の女って感じのきれいな人の方が似合うと思うんだよね。

……一体、誰と選びに行ったのかな？ エリートくん？

ニコニコと笑みを絶やさずにいるあたしに、本橋は軽くワイングラスを持ち上げて乾杯の仕草をする。あたしも一応それに従って、グラスを揺らした。

何に乾杯なんだか。もう、手に入れたつもりなわけ？

……やっぱ、ダメ。こいつパス。

条件は結構いいと思うし、条件優先で選んでるあたしとしては、ちょっと惜しい気もするけど。

いくらなんでも、こんな、付き合う前から怪しい気配を感じる男は、願い下げ。

「そうだ！ あたし、とっても大好きなおすすめのお店があるんです

よお。……ちよつと穴場なんですけど。もしよかったら、今度、本橋さんも一緒に行きませんか？あたし、このお礼にごちそうしちゃういます」

極上の（と人から言われる）笑みでブレスレットを揺らしたら、予想通り、本橋は勝ち誇った笑みで食いついてきた。

「へえ！それはうれしいな。うん、ぜひ今度はそこに行こっか」

あたしから食事に誘ったことなんてないもんね？もらった！とか思ってる？

でも、そんなに甘くはないんだな、これが。

「はい！楽しみにしてて下さいね」

あたしも、楽しみにしてるから。

あなたの引きつった顔が見られるのを、ね。

プロローグ（後書き）

麻由編、始まりました。

相変わらずつたない文章ですが、よろしく願います。

1

各務麻由^{かがみまゆ} 25歳独身。職業英語教師。

色白の肌にぱっちり二重まぶたで、髪はふわふわウェーブのロングヘア。背はちっちゃめだけど、スタイルは悪くないと思う。

男から声かけられること多数、この年になっても相も変わらずナンプは日常茶飯事。教え子の高校生達からは“麻由ちゃん先生”なんて愛称までもらっちゃって、親友からは“アイドル教師”なんて呼ばれてるあたしは、きつと。

とっても、かわいい女、に違いない。

……………でも。

‘ギャップが許されない女、’

それが、あたし。

初めて恋人と呼べる存在ができたのは、中学2年の夏だった。

彼はクラスメイトで、学校の中でもかなり人気のあるカッコいい男の子だった。

そして、あたしはあたしで、評判のかわいい女の子だったんだと

思う。

だから、あたし達が付き合うようになるのは、とっても自然なことで、ととして誰からも受け入れられた。

手をつなぐのも、キスをするのも彼が初めて。さすがにその先まではなかったけど、あのままずっと付き合っていれば、そうだったのかもしれない。

最初はお互いにドキドキし通しで、ろくな会話もできなくて。でも、彼氏彼女と呼べる存在がいることに、幸せを感じてた。

……だけど。

あたし達は、半年で別れた。

原因は男の浮気……って言っても、中学生のことだから、他の女の子と手をつないでたっただけだったんだけど。

それでも、その年頃の、恋に恋しちゃってるようなあたし達にとっては、喧嘩するのに十分な理由で。

今ではもう、顔だつてろくに思い出せやしない相手だけど、あいつがあたしを振る時に言った言葉だけは忘れられない。

「麻由って……かわいいの、見た目だけだよな」
って。

それを聞いた時。

はあ!?!なにそれ?性格ブスってこと?そう言いたいわけ?

……むかつく!

って、そう思ったあたしは。

バッチーンって、きつつい平手打ちして、仁王立ちして言ってやったの。

「あんたなんか優柔不断の浮気男のくせに!あんたみたいなヘタレ野郎がえらそうな口聞くなっ!」
ってね。

………まあ、今になってみれば、あいつの気持ちもわからないくはないんだけど。

浮気現場(?)を見ちゃったあたしは、『浮気者っ!』って、当然怒って怒って怒りまくったわけだけど。あいつとしては、あたしみたいな、^{はかな}儂い系かわいい子には、そんなじゃなくて、『どうして?』って、か細く言いながら、涙を流して欲しかったんだろうし?

実際にそうしてたら、別れることにはならなかったんだろうな、とも思う。

でも。

あたしはそんなじゃないし。

外見はとびきりかわいくて、守ってやりたくなるような、思いっきり甘えてくれそうな、そんな感じかもしれないけど。

……正直、一人で生きていけるくらいには強いと思うんだ、あたし。

でも、中学生だったガキのあたしには、そんなことわかるはずもなく。

きっと次の王子様はあたしを本気で好きになってくれるんだって、そんな淡い期待を抱いて、暴れるだけ暴れてから、涙をぬぐった。

………なのに。

おかしいな、と思い始めたのは高校に入ってから。

「ごめん、俺には無理」

何が？

「麻由って、結構きついよな」

どういうこと？

「お前、俺いなくても大丈夫だよな」

まあね？

で、その隣の子はあんたがいないと、ダメなわけ？

「麻由ちゃんってさ、強い子だったんだね」

.....ああ、うん。割とね。

「ごめん、思ってたのと違ったわ」

.....思ってたのって、どんなの？

「ギャップもありすぎると、ちょっと、な」

.....。

.....そうなんだ。

ありすぎるギャップって、ダメなんだ？

それでもって、‘きつい女の子が実はかわいかった’、だったら許されても、‘かわいい女の子が実はきつかった’、ってのはダメなわけだ？

へえ、そっかあ.....って、なんだそれっ！？

とりあえず、告白されて合格点なら付き合ってみよう、なんてことを繰り返してたあたしは、その男ども皆に、3ヶ月と経たずに、似たような理由で振られた。

.....そして、高校2年の冬、悟ったんだ。

あたしはどうやら、ギャップが許されない女らしい、と。

外見通りのかわいい女でなければならんだ、と。

.....。

.....だったら。

そんなに騙されたいなら、騙してあげようじゃないのって、思った。

それからといえば、自分の外見にみあう性格っていうやつを研究して、初めこそボロがでて失敗もしたけど、だんだん振られることもなくなって……。

成人した頃には、今のあたしが出来上がった。

外見も中身もかわいいと思われる女が。

ま、そとづら外面限定なんだけど。

「……………んん？」

「はい！」

あたしが連れてきた店の前で、本橋の笑顔がさっそくひきつった。

目の前にある居酒屋の、破れかけたのれんには“かつちゃん”の文字。

ちょっと小汚い雰囲気、入るのをためらいそうになるその小さな店に、不釣り合いな外見のあたしは、少し悲しげに本橋を見上げてみる。

「もしかして、こういうお店……ダメ、でした？」

「え!?! う……い、いや? 良さそうなお店だね……」

あははって、空笑いがむなしいよ? お坊ちゃま。

「よかったあ! 本橋さんならきつとそう言って下さるって思ったんです! さ、入りますよ?」

本橋の高級スーツの袖を軽くつかんで、その店の引き戸を開ける。

カラカラツと意外にも軽い音で戸が開くと、

「らゝあっしやい!」

って、ちよつとドスの効いた声がして、こわもての大将が、ギロツと客を睨む。

「ひっ……」

後ろから小さく、情けない悲鳴が聞こえた。

見なくてもわかる。絶対、今、彼の顔は青ざめてる。

……あゝあ、可愛いそうに。もつと愛想良くすればって、いつつも言ってるんだけどね、ごめんね？

「こんばんはあゝ、大将」

「おう、らっしやい。……今日はまた、えらいべっぴんを連れてるじゃねえか」

意識してかわいらしくした挨拶に、大将が全てを察してニヤツと笑う。

あたしも、本橋には見えないように、同じ笑みを大将に返した。

それから、まだ早い時間で空いている店内の、小さなテーブルに腰を下ろす。

「やあっだゝ、大将ったら、もお。男の人にべっぴんだなんて、失礼だよ？」

「おう、そうか。……そいつは、すまねえなっ」

大将がおしぼりとお冷、あとお通しのふろふき大根をあたしたちのテーブルにドンツと置いて、本橋をギロツと睨んで謝った。

「い……いえ……滅相も……」

「おう！大将っ！熱爛だ熱爛！いやあ、春先だつてのに、こう寒くっちゃ、熱爛でもなきややってらんねえや！……おおっとお、麻由ちゃんじゃねえかつ！」

『ごさいません』と、小声で答えようとした本橋をさえぎるように、勢いよく扉が開いて、ぞろぞろっと3人ほどの店の常連客が賑やかに入ってきた。

……しかもまた、ガラの悪そうなのが。

本橋が、更に顔を引きつらせるのがわかる。

「あ！木村のおじさん！久しぶり〜！」

「おうおう、ここんどこ麻由ちゃんに会えなかったから、おっちゃん、さみしかったぞお」

常連客と普通に会話して、しかも頭まで撫でられてるあたしに、本橋がさらに固まった。

本当の本当に、あたしがこの店を行きつけにしてるってことがわかったんだろう。

きっと今ごろ、あたしに抱いていたイメージが、ガラガラって音を立てて崩れていつてるんだろうなあ。

……さて、と。そろそろ助けてあげないとかわいそうかも？

「あれ？本橋さん、大丈夫ですか？なんか顔色が……」

今気づいたって感じで、心配そうに顔を覗き込んだら、彼がハッとして、額の汗を拭きながら、さも具合が悪いかのように、突然コホンと咳払いしてみたりする。

「あ、うん……。ちょっと、朝から風邪気味だったから……」

へえ、風邪気味。

さっきまで、ものすつごく元気だった気がするけど？

「ええ！？大丈夫ですか？」

「う、うん。ちょっと熱が出てきたかなあって……。だから、あの、申し訳ないけど……今日はこれで……」

ゆっくりと立ち上がった本橋に、あたしも立ち上がって表情を少し曇らせてみせる。

心底心配そうに見えるはずのあたしの視線から、本橋がスウッと目を逸らした。

一応、後ろめたい気持ちはあるらしい。

「そう、ですか……。でも、ほんとに大丈夫ですか？あたし、送りま……」

「や、いいから！」

人の言葉をさえぎった本橋が、だんだん戸の方へ後退していく。

「え、でも……」

「うん、君は気にしないで！ほんつとに、ごめんね。あ……ごちそうさまでした。それじゃ！」

「あ……」

カラカラッ、ピシャンッ

……………。

……………はやつ。

「クッククッ……わあっはっは！」

「今日のはまた、早いお帰りだったなあ」

「肝の小せえ野郎なこと！」

本橋が脱兎のごとく帰って行って、しばらくの沈黙の後、木村のおじさんの笑い声を筆頭に、柿田のおじさんと山川のおじさんの爆笑が店内に響いた。

あたしも一緒になって軽く笑いながら、カウンターの中に移動して、勝手にビールを入れる。

すると、大将にコツンッと頭を小突かれた。

「いたっ……！」

「ったあく、お前は。男を振るのに俺の店を使うなっていつつも言ってるだろうが」

「……違うもん。男を振るのにじゃなくて、男に振られるのに使っ

てんの」

「似たようなもんだろうが……」

「全然違うって。大体、使われたくなかったら、もっと愛想良く接客すればいいでしょ。っていうか、叔父さんだって、結構ノリノリじゃない？」

大将こと、叔父の勝也へベエツと舌を出してから、立ったまま、冷たいビールを一気にあおる。

この店“かっちゃん”は、あたしの正真正銘の叔父、勝也叔父さんのお店なのだ。

ぷはあゝと息を吐けば、すどんと肩の力が抜けた。

「ばあっか。俺はただ、お前の相手にふさわしい野郎かどうか、見極めてやろうと……」

「出たよ！かっちゃんの姪バカ」

叔父さんの言い分に、すかさず山川のおじさんから野次が飛ぶ。

「うるさい！かわいい姪っ子をかわいって言って、何が悪いっ！」

客相手に怒鳴る叔父さんに、クスツと笑ってしまってから、もう一杯ビールを注いで、カウンターへと腰掛けた。

……たぶん、あのエリートくんから連絡が来ることは、もうない。

そう思って、うまくいったと喜ぶ気持ち半分、やっぱり嘘で固めたあたししかダメなんだなっていう悲しい気持ち、半分。

今までも何度かここへ彼氏候補を連れてきたことがあった。

その結果は……見事惨敗。っていうか、あたしの全勝？

小汚いと思われがちな店構え。こわもての大将に、ガラの悪い常連客。

本当はとっても暖かいこの雰囲気、この人達を、その見た目だけで判断して、しかもあたしがここを最^{ひいき}屑にしてると知って、引いていく男達……。

本当のあたしを好きになる男は、きっと現れない。

……でも、本当のあたしを好きになってくれる男じゃなきゃ、あたしもきつと愛せない。

自分を偽り続けて、それに気づいた時。

それなら、みんながうらやむような相手を探してやろうって思った。

……お金持ちで頭も良くて、できれば顔もよくて、そういういわゆる条件のいい男を選ぶうって。

だって、どうせ愛することも愛されることもできないなら、できるだけ条件のいい男がいいに決まってるじゃない？

「叔父さん、いつものちようだい」

「はいはい……っと。ちゃんと腹に入れてから飲まねえと、胃に穴があくぞ？」

2杯目のビールを空にしたあたしに、叔父さんが焼き鳥数本と揚げ出し豆腐を出してくれる。

ありがたくそれを口に入れば、心の中から暖かくなるような、そんな気がする。

「おいしい〜！」

絶対、高級イタリアンなんかより、こっちの方がおいしいよ。

「ほらよ」

おじさんがあたしに“いつもの”をくれる。

焼酎のお湯割り、梅干し入りのやつ。

「さんきゅ」

そのグラスを受け取って、一口目はそのまま頂いて、その後、割り箸で梅干しをしっかりとほぐしてから二口目。

似合わないとか、親父くさいとか言われようがなんだろうが、あたしはこれが一番好きだ。

「ん〜、幸せ」

「……焼酎飲んで幸せ感じるお前もかわいいけどよ。お前も25だろ？そろそろ本腰入れて相手探した方がいいんじゃないか？兄貴も心配してたぞ？」

焼酎とつくねに幸せを感じてたあたしに、叔父さんが余計なことを言ってくる。

「おおきなお世話。別に、今の世の中結婚なんてしなくても生きていけるし。……第一、あたしは、このお店の良さがわからない男なんて、真っ平ご・め・ん！」

「そうだ、そうだ！かっちゃんの店の良さがわからねえやつなんて、男じゃねえよお！」

あたしの後を、すでに酔っ払い始めた木村のおじさんが続けて、2人で『ね〜』ってうなずきあう。

「……ったあく。うれしいこと言ってくれるねえ」

やっぱり姪バカな叔父さんが、グスツと鼻をすすりあげた。

もう、泣き虫なんだから……。

その姿に笑ってから、こっそりと、小さくため息をついた。

……あたしだって、本腰入れて探してないわけじゃないし。

条件のいい男を選ぶにあたって、あたしの中で絶対にゆずれないことが1つだけあって。

それが、この店。

いくら愛し愛される関係をあきらめるって言っても、さすがに少しも好きになれない人を恋人とは呼べないし、呼びたくもない。

だからとりあえず、この店を好きだと、せめて、この店を好きなあたしに引かない男なら、あたしも少しは好きになれるんじゃないかなって、そう思ったんだけど。

……これが、思った以上に難しかったんだよねえ。

あたしの好きな店Ⅱおしゃれなカフェ、みたいなイメージ持っちゃってる彼らには、どうにもこの店が受け入れられないらしくって。

今日みたいに途中で帰っちゃうのは当たり前。最後までねばった人もいたけど、やっぱりその後から様子がおかしくなって、ダメになっちゃったし。

おかげで最近じゃあ、どうでもいい男を振るのにも（格好だけは、振られてるんだけど）使っちゃってる始末だ。

「はあ……」

特大のため息を吐いて、行儀悪く頬杖をつく。

一人で生きていける。それは本当。

でも、でもね？そんなの。

……やっぱり、さみしい。

そう思うあたしは、我がままなのかな？

「じゃあ、本橋さんもダメだったのか？」

そう言って、暖かいアールグレイを出してくれたのは、あたしの働く私立藤花学園の同僚で、親友でもある筑茂^{つくも}暁^{あきら}。

そう、あたしを“アイドル教師”なんて言った親友さま。

毎日、昼休みになると暁のいる図書準備室へやってきて、一緒にお弁当を広げた後に、暁の入れてくれる紅茶で一息つくのが、あたし達の日課だったりする。

「そ。まあ、あの男はこっちから願い下げだったけどね。もお、早かったよ？速攻で帰って行ったの。みんなで笑っちゃった」

「へえ……。でも、なんでみんな勝也さんの店の良さがわからないんだろうな？料理だってすごくおいしいし、勝也さんはとても暖かい人なのに……」

暁が、そう言って首を傾げた。

……やっぱり、暁はきれいだなあ。

思わず、その横顔に見とれそうになる。

暁は、言葉使いは男っぽいけど、とっても美人な女の人だ。すらっと均整の取れた細身の体にパンツスーツをまとうて颯爽と歩く姿は、宝塚のトップスターのようなかつこよさがある。

ただ、男の人からは声をかけにくいタイプの美人らしくて、あたしと違って、男に声をかけられることなんて滅多にない。

……おかげで、本人にも自分が美人だという自覚もない。

「あたしが男だったら、絶対に暁を口説くのになあ」

こんなに美人で、そのくせかわいくて。あの店のよさもわかるなんて、言うことないもの。

「ええ？それは私が男だったら、の間違いじゃないか？」

暁がそう言って、苦笑気味に笑った。

もうっ。ほんつとにわかってないんだよね、この人。

「間違ってるの！暁はかわいいもん。あたしが男だったら、絶対にぜえつたいに暁を選んだから」

確かに、外見で言ったら暁が男であたしが女の方がいいのかもしれない。

でも暁は、外見はかっこよくても、中身は、かわいいものが大好きで、ちよつと天然ボケ入っちゃってる、かわいい女の子って感じの人なんだ。

「……そっか。ありがとう」

照れて、ふわって笑った暁を、やっぱりきれいだなあって思いな

がら、彼女には幸せになって欲しいって、そう思う。

暁は、あたしとまったく正反対のコンプレックスを持ってるから。

あたし達は、似てるから……。

「……きつとあたし達、外と中、逆に入っちゃったんだよね。あたしが暁で、暁があたしだったら、きつとギャップなんてものに悩まされることなんてなかったかもしれないあって、思わない？」

暁の外見であたしの性格なら、きつとそんなにきつく感じないだろうし、あたしの外見で暁の性格なら、何の迷いもなく、かわいいものをかわいいと叫べるもの。

「うん。そう思ったことも、確かにあるけど……」

「でしょ？」

「でも、私は麻由が麻由でよかったと思っているぞ？ 麻由は性格ブスなんかじゃない。確かにきついことを言われる時はあるけど、私はずいぶんそれに救われてきたし、麻由がいてよかったって思うから……」

暁がそう言って、ニコツと笑う。

「暁って……」

なんでこうも素直に恥ずかしいことが言えちゃうの……。

「ん？」

こういう素直なところ、ほんとに暁にはかなわない。

あたし、いい友達持ったなって、心の中がほっこりと暖かくなる。

男なんていなくても、暁がいればいいや、なあんてちょっと思ったりするのは、やばいかなって思うけど。

「やっぱりあたし、暁にする！ねえ、暁。あたし、幸せにするからさ、結婚しようよ」

そう言って抱きついたら、暁にベリベリッとはがされる。

「……阿呆」

ちょっと顔を赤くして、照れたような、呆れたような暁にそう言われて、楽しくなってしばらくクスクスと笑い続けた。

……今回もダメかな。

本橋からは案の定あれ以来連絡はなく、4月も半ばを過ぎた今は、新たに知り合った某大手製薬会社の係長という28歳の男から果敢なアプローチを受けている最中だった。

今夜もその係長に誘われて、高級寿司店でおいしいお寿司を食べ、途中で仕事のトラブル収拾に借り出されて行った彼と別れて、

今は夜の街を散策中、なんだけど。

「はあゝ……」

つい大きいため息をついてしまう。

……係長は、一緒にいて疲れるんだよね。

まあ、若くて係長なんだから、できる人なんだろうし、自分の仕事に誇りを持つのも大事だとは思うけど。

その上でストレスもたまるんだろうし、ついつい愚痴っちゃいたくなるのも、よおつく、わかるんだけどっ！

仕事の自慢、仕事の愚痴、自分の自慢、部下の愚痴、自慢、愚痴、自慢、愚痴……の繰り返しじゃ、聞いているこっちは、疲れるってば！

あゝ、もう！なんか、飲みたい気分っ！

……って、言っても、今日は“かっちゃん”閉まってるし。

仕方がない。家に帰って飲も……。

「……ん？」

鬱陶しいナンパを適当に笑顔でかわしつつ、タクシーを捕まえようと大通りへ向かって歩き始めた時、そのひっそりとしたお店の名前に目が止まった。

“コクーン
c o c o o n”

木のシンプルな看板に、黒字で印刷されている名前、それは“繭まゆ”を表す英語。

こんなお店、あったんだ？

……………。

……入って見ようかな。

名前に惹かれて木の扉をゆっくりと開けて入ると、まだ出来てそんなに経っていないらしく、思った以上にきれいな店内に、ボリュームを絞って、ゆったりとクラシックが流れていた。

おおっ、結構、素敵かも……！

小ぶりのテーブルが3席とカウンターがあるだけの、そんなに広いバーじゃないけど、ほのかに灯されたライトや最小限にとどめられた装飾が、とても落ち着いていた雰囲気を出してて……。

「いらっしやいませ」

カウンターの一番右端に腰掛けると、2人いるうちの若い方、20代後半くらいに見えるバーテンさんが、柔和な笑みで迎えてくれた。

「こんばんは。初めて来たんですけど、とっても素敵なお店ですね！」

「ありがとうございます。何になさいますか？」

なんだかうれしくなって、にこやかに言うと、バーテンさんも営業用ではないうれしげな笑みを浮かべてくれた。

「じゃあ……モスコミュールを」

「かしこまりました」

バーテンさんが、一礼して去っていったから、チラッと店内を見まわす。

テーブル席は2つ埋まっていて、1つはカップルが、残りの1つは女性の2人連れが、それぞれにここのお店の雰囲気壊さない程度に、静かに談笑している。あとはあたしとは反対側の端に、スーツの男の人が50歳前後と見えるもう一人のバーテンさん（店長かな？）と話していた。

繭をイメージしてだろうけど、全体的に白を基調とした店内は、不思議と寒々とした印象はなくて、暖かい気持ちにさせてくれる。

「お待たせ致しました。モスコミュールです」

さっきのバーテンさんが、あたしの前に、ナッツを乗せた小さなお皿と、グラスを置いてくれる。

モスコミュールを一口飲むと、その甘さが口中に広がった。

「おいしい……。こんなお店があったなんて、まったく知りません

でした。いつオープンしたんですか？」

「去年の秋です。こんなわかりにくい場所ですので、お客様のよう
に、通りかかって入ってきて下さる方はとても珍しいんですよ」

バーテンさんが、グラスをきれいに磨きながら答えてくれる。

確かに、メインの通りから少し入ったところにあるもんねえ。

「あたしも、普段は一人でこういうお店に入るのって勇気がなくて
ダメなんですけど、偶然このお店の看板が目に入って、ここの名前
に惹かれちゃって……」

「名前？c o c c o o n、ですか？」

バーテンさんの、グラスを磨く手が一瞬止まって、首を傾げる。

「あたしの名前、まゆっていうんです。字は違うんですけど、同じ
名前だから」

「ああ、そうなんですか！それはそれは……」

そう言ったバーテンさんの細い目が、少しだけ丸くなった。

テーブル席の方から、『すみません』と彼を呼ぶ声が聞こえる。

「はい。――では、偶然が招いた今宵のひとときを、ゆったりと楽
しんでくださいね」

若いバーテンさんは、そう言って人懐っこい笑みを浮かべると、

テーブル席の方へ注文を聞きに行った。

うんうん。なかなか感じのいい人だ。ほんとにいいお店を見つけたかも。今度、暁も誘ってこようかな。

バーテンさんにはああ言ったけど、あたしは割と、新しいお店に入ってみるのは好きだ。もちろん当たりハズレはあるけど、今日みたいによい出会いをすると、すごく得した気分になるし。

別にバーテンさん相手に、そんな嘘をつくこともないんだけど、あたしって、見た目そういうのできなそうっていうイメージらしいから、そういうことにしてる。

化けの皮という奴は、一度被ったら、よっぽど気を許した相手以外の前では剥がさない方がいいし。ここ一番って時に些細なことから剥がれちゃったりするから。

モスコミュールを飲みながら、ナッツを一口に入れた。

「ふう……」

それにしても……。

今日の係長はいつにも増して最悪だったなあ。

最近トラブルが続いてるのか、愚痴りまくり、こっちの話なんて初めから聞く気なし。せっかくのおいしーいお寿司が台無しだった。

……やっぱ、あの人も今度“かっちゃん”へ連れて行こ。

そこで合格点をクリアできなければ、もういいや。

今言い寄ってきてる男は、係長意外にあと2人。その人達とも食事に行ったりしてるけど、どうもピンとこない。

うーん……。彼らは“かつちゃん”に連れて行くまでもないかな。

はあ……。どこかにコレって人、いないもんかな……。

そんなことをつらつらと考えて、小さなため息を繰り返していた時だった。

2杯目は何を飲もうかなって、メニューを手にしたら、突然あたしの前に、きれいなオレンジ色の液体の入った新しいグラスが置かれた。

「え？」

驚いて顔を上げると、さっきの人じゃなくて、スーツの客と話をしていた方の中年のバーテンさんが、にこやかに笑みを浮かべていた。

「あちらのお客様からです」

……………は？

3

バーテンさんが手で示す方には、例のスーツの客がいる。

あたしがそっちへ目を向けると、照明の具合でこっちからは顔がよくわからないけど、その人が軽く会釈をしてきた。

……………。

……………こ、このシチュエーションって！昔、ドラマなんかであったやつ！？

うわぁ、本当にやる人いるんだ？……こんな気障ったらしいこと。

スーツの男から、再びバーテンさんに視線を移すと、にこやかな笑みを浮かべてこっちを見つめていた。

「……………」

再びオレンジ色のグラスへ視線を落として、フフツと小さく笑う。

……………なんか、おもしろそうじゃない。

めったにあることじゃないし、ここはのってやろうじゃないかと、男の方へ『いただきます』って、グラスを持ち上げて、とびきりの笑顔で小さくつぶやいた。

そして、グラスに口をつけると、甘酸っぱいオレンジの香りが口

の中に広がって……。

「ん！おいしい……！」

本当に、おいしかった。

てっきり、すごく甘ったるいお酒だろうと思ってたから、意外な程あっさりしたそれに驚く。

「気に入って頂けましたか？」

真横で声がして振り向けば、酒をおごってくれたスーツの男が、さわやかな笑みを浮かべてそこに立っていた。

あら、まあ………上等な男だったんだ。

明らかに仕立てのいいスーツ。ちらっと見えた時計は、シンプルなデザインだったけど、たぶん超一流ブランド品。

年はあたしより少し上？係長と同じくらいかな？染めた様子のない髪を短めにカットしていて、パツと見、とてもさわやか。

でも、なんか……目にすごく力がある感じ。

その目で睨まれたら、背筋が凍るような、逆に情熱的に見つめられたら、鼓動が速くなってしまいそうな、そんな目。一見さわやか好青年に見える中で、その目だけがこの人を只者ただものじゃないと思わせてるっていうか……。

とりあえず、一瞬の間にそれだけのことはチェックしておいて、

少し照れたように、ニツコリと微笑んでみた。

「ありがとうございます。とても、おいしいです」

「それは、よかった。……こちら、よろしいですか？」

隣の席を示す彼に、うなづく。

スマートな仕草で左横に腰を下ろした彼の前に、中年のバーテンさんが新しいグラスを置いた。

「突然で驚かれたでしょう？すみません」

「あ、いえ、そんな……。でも、こんなの、されたの初めてで……。ドキドキしてます」

謝った彼に、胸にちよつと手を当てて、そう言う。

「僕も、初めてです。ものすつごく恥ずかしかったので、もう2度としませんか……」

「ええ？そうなんですか？」

意外にも顔を赤くしたスーツの彼の、本当に照れたような姿に驚いて目を丸くする。

てつきり、慣れてるもんだと……。

勇気あるね。そんなにあたしの顔が好みだった？

目があつて、お互いにクスクスと笑い合う。

……じゃあ、その勇氣に敬意を払って、たっぷりとかわいい女を演じてあげようじゃないの。

「ああ、申し遅れました。城ヶ崎じょうがさきと申します。あなたは、まゆさんとおっしゃるのだと……。すみません。さっき話が聞こえてしまつて……」

「いいえ、気にしないで下さい。……各務麻由です。改めまして。城ヶ崎さん、ごちそうさまです」

名乗ろうかどうしようか少し悩んだけど、下の名前はもうわかつてるんだして、ニツコリと笑みを浮かべて、できるだけかわいくみえる仕草でそう言ったあたしに、城ヶ崎さんは、『いえ』と軽く頭を振った。

その表情に、一瞬戸惑いのようなものが見えた気がして、内心首をひねる。

あたし、今、なんか変だった？

「麻由さん、とお呼びしても？……馴れ馴れしい、かな？」

何事もなかったようにさわやかに問われて、さっきのは気のせいだったのかもと思う。

「全然！あたし、童顔だから、いつも‘ちゃん付け’されちゃうんですよ。だから、麻由さんなんて呼ばれ慣れてなくて、恐れ多いくらいで……」

これはほんと。麻由さんなんて呼ぶ奴、あたしの周りにはいない。

城ヶ崎さんが、それを聞いてクスクスと笑う。

「恐れ多いって……。おもしろい人だな。童顔って、僕より年上には思えませんが、そうだったりしますか？」

城ヶ崎さんは、28歳だという。

やっぱり係長と同じ年。でも、絶対、係長よりクラスは上って感じ。

うーん、この若さでこのスーツと時計？一体何者よ？お坊ちゃまっていう感じはないし、どっかの重役？でも、それにしても若すぎだよね……？

頭の中ではそんなことを計算しつつ、それをやっぱり顔にはまったく出さないようにして、いたずらっぽく笑ってみる。

「女性に年を尋ねるのは失礼なんですよ？」

「ああ……すみません。そうでした」

「ふふ。冗談です。あたしは、25歳です。あんまり胸を張って言える年じゃないですけど……」

「そうかな？僕は、女性は25を過ぎたくらいから美しさに磨きがかかると思うけれど……？」

あたしが年下とわかって安心(?)したのか、城ヶ崎さんの口調がくれたものに変わる。

でも、敬語を使っていた時と変わらない心地よさがこの人の口調にはあって、全然馴れ馴れしさやいやらしさを感じないのが不思議だった。

「お上手ですね。さすが、こんなにかっこいいことができちゃう人って感じですね?」

そう言って、オレンジのグラスを持ち上げて一口飲むと、城ヶ崎さんが困ったように自分の顔をひと撫でする。

「……あんまり、いじめないでくれるかな?」

その、困った顔が結構かわいいな、って思って、ついクスクスツツと笑ってしまった。

「ごめんなさい。そんなつもりはなかったんですけど。……あ!そういうえば。このカクテル、とってもおいしくて気に入っちゃったんですけど、城ヶ崎さんが選んで下さったんですか?」

このオレンジのカクテルを一口飲んだ時に感じた疑問を聞いてみる。

……だって、今までこういう場所に連れてこられて、『君好みだと思っんだ』って飲ませられたのは、大抵甘ったるいので、何考えてるんだか、やたらアルコール度数の強いやつばかりだったから。

まあ、もともとアルコールにはめっちゃ強いあたしが、そん

なのに酔うわけないんだけど。酔ったふりして、適当にかわして、さっさと帰ったりしたんだけど。

だからこそ、この甘すぎず、アルコールもきつくないカクテルは、とても嬉しい誤算だった。

あたし、元々お酒は甘くない方が好きだし。

「僕が選んだというか……。僕はただ、麻由さんが難しい顔をしてため息をついていたから、そういう時には甘いものよりも、あっさりとしたものの方がいいだろうと思ってそう言っただけだよ」

え……。あたし、そんなに顔に出してなかったと思うんだけど、この人って結構鋭い。

やっぱり、只者じゃないのかも……？

「あとは、彼、木島さんきじまにお任せしたから」

城ヶ崎さんから出た木島さんの名前に、中年のバーテンさんがこっちを見て笑顔で軽く会釈する。

それに笑顔で返すと、ゆったりとした仕草で新しいカクテルを2つ用意した彼が、そっとそれをあたし達の前に置いた。

「うわぁ、真っ白……！」

目の前に置かれた真っ白なカクテルに、素直に目を輝かせた。

三角形の底に、うっすらと見えるピンクはきつとさくらんぼだ。

真っ白な液体がまるでさくらんぼを包んでいるみたい……。

「当店の名前にちなんだカクテル、‘cococon’です」

そっか、繭なんだ、このカクテル。

うんうん。そんな感じ。きれい！

「お2人の素敵な出逢いに。ささやかではありますが、私からサービスさせて下さい」

木島さんがそう言って、ニツコリと笑った。

あらあらまあ……。

とても照れくさいサービスに、隣を見れば、顔を赤くした城ヶ崎さんが、困ったようにまた顔を撫でていた。

「まったく、木島さんは……」

ニコニコ顔の木島さんに城ヶ崎さんが何か言おうとした時、プツと噴き出す声が聞こえた。その声の方へ顔を向けたら、グラスを洗っていた、さっきの若いバーテンさんが肩を揺らして必死に笑いを堪えている。

……………？

「…………まゝきゝたゝ」

まきた？！？

さっぱり何が起こっているのか理解できてないあたしを置いて、こぶしを握り締めてる城ヶ崎さんがそう言うのと、若いバーテンさんがこちらへやってきて、木島さんの隣に並んだ。

ものすつごく楽しそうなニヤニヤ笑いで。

「失礼しました。……でも、俺にもサービスさせて欲しいですね。動揺するオーナーなんて貴重なもの、見せてもらえたし」

え？ オーナー？

「^{まきた}蒔田。……ここに客で来ている時にはオーナーはやめてくれって何度も言ってるだろ？」

「はいはい、わかりました。……では、お客様。今宵、偶然が連れてきてくれたこちらのかわいい方に、私からも一つ、サービスさせて頂いてもよろしいでしょうか？」

「……勝手にしてくれ、もう」

あつという間に、蒔田さんと呼ばれたバーテンさんと城ヶ崎さんの間で話が進んで、その間、あたしはなんとか頭の中で2人の会話を整理していった。

木島さんがにこやかな笑みを崩さない中、蒔田さんは再びグラスを洗いに去っていく。

あたしは、首を傾げながら、なんかぐったりした様子の城ヶ崎さんへ顔を向けた。

「あのお……。城ヶ崎さんが、ここのお店のオーナーさんなんですか？」

「……ああ、うん。まあ、僕がというより、会社が、だけどね」

会社？会社でオーナーって……！？

「城ヶ崎さんって、社長さん！？」

「……あ……そんな名前ついていたかもね」

肩書きに。

普通の男なら自慢するべき場所を、ものすごく言いにくそうにつぶやく彼の様子に驚くと同時に、興味がわく。

……一体なんの会社の社長なわけ？言いにくい会社？実はヤのつくお仕事だとか……。あ、あるかも、これだけ眼力のある人だもんね。

「……何か、変なことを考えているね？麻由さん」

「え！？あっ……えっとお……」

しまった、思わず本気で顔しかめたかも。

ごまかすように、えへへと笑うと、城ヶ崎さんが、苦笑しながら一枚の名刺を滑らせた。

その名刺を手にとって、再び驚く。

代表取締役社長、城ヶ崎直人。なおとその上にあつた名前は……。

「城堂じやうどうコーポレーション……って、あの、j o - d o ?」

最近、急成長中とかっていう？有名企業の？

「たぶん、それだね」

「……………」

……うつわー！只者じゃないとは思ってたけど、ほんとに只者じゃないじゃない！

j o - d o っていえば、あたしも詳しくは知らないけど、まだできて数年しか経たないのに、破竹の勢いでぐんぐんと成長してるIT企業だよねえ？その社長……！？

……………上等どころの話じゃない、超一級っ！

「あたし、すごい方からごちそうになっちゃってたんですね……」

びっくりって（いや、ほんとに今回はかなり驚いたんだけど）、目を丸くして城ヶ崎さんを見つめたら、また彼が困ったように苦笑した。

「別に全然すごくなんでないよ。大学時代に、たまたま友人と作ったソフトが売れたってだけで作った会社だし……。肩書きだけは社長になっているけれど、これだけ会社が伸びているのは、一緒に会

社興した副社長の堂本どうもとに経営の才能があったのと、社員達が優秀だからだよ」

堂本さんという副社長のことと社員のことを話す彼の目が一瞬すごく優しくなった。

城ヶ崎さんという人は、世の社長に比べるととても消極的な人に見えるけど、会社を愛する気持ちはすごく強そう。

でも、謙遜してるけど、これだけ目に力のある人だし、今のj o—d oが伸びてるのは絶対にこの人の力が大きいんだと思う。

……なんか、この人って、あたしが会った今までの男と全然違う感じ。

もしかして、中身も一級だったり……？

……ううん、まだわからない。そんな完璧な男がいるとも思えないし。

「それに……」

言葉をつなげた彼が、視線を動かしてあたしを見つめた。

その力のある瞳の奥に見えたかすかな情熱に、勝手に鼓動が跳ねる。

「今の僕は、ただの男だ。……君を口説こうとしている、ね」

「！」

……その目は卑怯。

顔がかすかに火照るのも、鼓動が速くなってしまうのも、その目のせい……。

この人は危険。警笛が鳴る。

その目だけで、好きだと勘違いさせられてしまいそう。そうなったら、傷つくのはあたし……。

でも。

「……上手に、口説いてくださいね？」

とびきりの笑顔で、そうささやいた。

だって。

こんな条件のいい男、逃す手はないでしょ！

4

“c o c c o o n”での出逢いから一ヶ月。

その間、あたしと城ヶ崎さんは、お互いの仕事の合間をぬって、何度か一緒に出かけた。

城ヶ崎さんの車でドライブに行ったり、映画を見に行ったり、おいしい食事に連れて行ってもらったり、“c o c c o o n”で飲んだり……。

ああ、一度、待ち合わせ先で暁にも会わせたっけ。『きれいな人だね』って、ちょっと見とれてたから、少し拗ねてあげたりもした。

その間、彼についてわかったことは、携帯電話を仕事用とプライベート用の2台持っていて、デート中、仕事用の方は電源を切ってしまうこととか。

意外に甘い物が好きだったりとか。

たまに煙草を吸う姿が、かっこよかったりとか。

どこへ行ってもあたしをさりげなく気遣ってくれることとか。

……………。

……………。

……………なんか、ほんとにいい男っていうか。

だって、仕事の都合で待ち合わせに遅れた時は必ず、小さなブーケを持って来たりするし。

しかも、忙しい人だし、結構そういうことがあるもんから、あたしの家、ブーケを活けた花瓶が増殖中だったりするんだけど。

うーん……。

絶対にモテないわけないし、あんな声のかけ方してきた人だし？結構遊んでるのかなって思ったのに、まったくもって他に女の気配はなさそうだし。

なのに、本気で口説いてるってわりには、アピール度が低いし……。たまに人の顔見て何か考え込んでたりするし……。

城ヶ崎さんって、謎。

「あ！かわいー……！」

二人で映画を見た帰り道、ペットショップのウィンドウ越しに見えた小さなダックスフンドがかわいくて。

「ね！城ヶ崎さ……」

そう言って振り返ったら、城ヶ崎さんと目が合った。

あ……。

たぶん、ずっとあたしを見ていたらしい彼のその目が、すごく優しく。

……トクンって、あたしのどこかが主張する。

「ああ、本当だ。小さいなあ……」

そう言って並んだ横顔を、ジッと見つめた。

「……………」

「ん？麻由さん？どうかした？」

視線に気づいて、こっちを向いた人に、ニツコリと笑う。

「なんでもないです」

「？」

この人なら、もしかしたら……。

そんな気持ちだが、どんどん強くなって。

……だから、最近考えてしまうんだ。

「城ヶ崎さんがオーナーをされてるお店って、ここの他にもあるんですか？」

何度目かの“c o c c o o n”でそう聞いたあたしに、城ヶ崎さんはまた『僕じゃなくて会社が』って前置きしてから、3つの店の名前を教えてくれた。

そのうち2つは、最近口コミで人気が出始めていると雑誌で読んだカフェと居酒屋。もう一つは聞いたことのないお店だったけど、城ヶ崎さんの話では、どうやら最近オープンした定食屋らしい。

あれ？バラバラ……。

「驚いた？」

「はい。みんな、バラバラなんですネ？てっきり“c o c c o o n”みたいなお店が他にもあるんだと思ってたから……」

あたしの反応にクスリと笑いながら、城ヶ崎さんが話してくれる。

「僕は、食べることが昔から人一倍好きで。実は、j o - d o の飲食部門を作りたいと言いつ出したのは僕なんだ」

「え？そうなんですか？」

あ、でも、そういえばこの人、おいしいものを食べてる時って、確かにすごく幸せそうな顔してるかも。その顔がまたかわいかったりするんだけど……。

それを思い出して、ちよつと納得。

「でも、堂本に反対されて。『畑違いのところへ手を出して潰れた会社はたくさんある』ってね。それでもなんとか説得して、『儲からないことがわかったら、即中止』と念を押された上で、小規模に作った飲食部門のメンバーと一緒に僕は、人探しを始めて……」

「人探し、ですか？」

「そう。チェーン店を作る気はなかったからね。形としては、優秀な人材を探して、その人がお店を出す手伝いをj o - d oがする。だから、バーだったり定食屋だったり人にあわせて店が違ってくるというわけ」

ああ、なるほど。

お店を作ってそこで働く人を探すじゃなくて、人を探してからお店を作るってことね。

でも、それって結構難しそう……。

「もちろんj o - d oが出す条件はいくらか飲んでもらわないといけないし、経営はj o - d oがしている形になっているけれど、お店自体はその人のものだから自由にしてもらってかまわないんだ。……ただし、こちらでダメだと判断したら、強制的に店を閉めるけどね」

最後にきっぱりと言った城ヶ崎さんは、いつもの優しい顔じゃなくて、厳しい経営者の顔をしていた。

あたしは優しい顔しか見たことがないけど、意外と厳しい社長だ
ったり？

……うーん、想像つかない。

「だから、そうならないためにも一番初めの人材選びが重要なんだ。
さいわいに今のところ皆がんばってくれているから、飲食部門の売
り上げは順調に伸びているけど。一番初めに作ったこれも、辺鄙な
場所に作った割には口コミで広まってくれているし……」

そう言って城ヶ崎さんが木島さんを見上げれば、彼がにこやかに
『ありがとうございます』と言った。

「木島さんは、ここでお店を出す前はどこにいらっしやっただす
か？」

あたしがどちらにともなく尋ねると、城ヶ崎さんに手で促された
木島さんが割と有名なバーの名前を言った。

あたしも昔、男に連れて行ってもらったことがある。

……男の顔は覚えてないけど。

「あそこはたくさんのお客様がいて、確かにそれぞれの腕は
いいけれど、その中でも木島さんの腕が一番だったと僕は思ってる。
にもかかわらず、木島さんはなんの肩書きも持っていないくてね。チ
ーフと呼ばれているバーテンダーは木島さんよりも若くて、でもど
う考えても腕も何もかも木島さんの方が上だったんだ。おかしいと
思わない？」

城ヶ崎さんの問いにコクコクとうなずく。

木島さんの作ってくれるカクテルはとてもおいしい。あたしがわがままにも『こういうのが飲みたい』と言えば、それにぴったりのを作ってくれる。

でも、それだけじゃなくて、城ヶ崎さんとここで待ち合わせして彼が中々来ない時なんかにも、さりげなく気を使って待ちくたびれないようにしてくれたり……。

本人は照れを含んだ顔で謙遜してるけど、バーテンダーとして、木島さんは一流じゃないかな。

「店長に妬まれてたんですよ、木島さんは」

あたし達の会話に、蒔田さんが突然乱入してきた。

気づけば、そろそろ店じまいの店内には、あたし達しか残ってない。

「あれ？蒔田さんも、同じところにいらっしゃたんですか？」

あたしが首を傾げれば、蒔田さんが大きくうなずいた。

「ええ。俺は下端でしたけどね。でも、木島さんはすごいって憧れてたんですよ。だからここにも押しかけちゃったんですけど……。でも、前の店長は木島さんの腕の良さを喜ぶどころか、妬んで嫌がらせしたりとか……」

「えー！ひどいっ……」

口に手を当てて顔をしかめたあたしに、蒔田さんが身を乗り出す。

「でしょう？ そいつがまた……」

「こちら、蒔田くん。おしゃべりしていないで、お二人に新しいカクテルをお作りして。せっかく練習台になって下さっているのだから……」

さらに昔の店長の悪口を言い募ろうとした蒔田さんを、木島さんが変わらぬ笑みで制した。

蒔田さんが叱られた子供のような顔をして、姿勢を正す。

「はい、すみません。ええっと……コホン。では、ご注文を」

木島さんへ素直に謝った後、蒔田さんは、城ヶ崎さんとあたしに少し緊張した面持ちで問いかけた。

っていうのも、木島さんの言ったように、あたし達が彼の練習台になっているからで……。

城ヶ崎さんが『お先にどうぞ』と目で、あたしを促す。

「えっとお、じゃあ……あっさりしたのを。アルコールは少なめで、少し甘めがいいです」

「……かしこまりました」

少し考えてからお願ひしたあたしに、蒔田さんがホッとしたよう

な顔をした。

蒔田さんの練習になるように、カクテルの名前はあげずに大まかな希望を出すことになってる。でも、蒔田さんの様子を見る限り、そう難しい注文ではなかったみたい。

ほんとはいつもの焼酎が飲みたいけどさ、ここはそういうお店じゃないし、そういうお店だったとしても、“かっちゃん”以外では頼まないようにしてるし、ね……。

「オーナーは？」

あたしの注文で気をよくした蒔田さんが今度は城ヶ崎さんへ聞くと、ピクツと彼の片眉が上がった。

「だから、オーナーはやめてくれと……。ああ、じゃあ僕は」

城ヶ崎さんが蒔田さんへニヤツと笑う。

一瞬、蒔田さんから『げっ』という声が聞こえた。

「僕の、今の気分にぴったりのものを頼む」

あ、やっぱり。言うと思った。

「うう……。か、かしこまりましたあ……」

オーナーと呼んでしまったことを後悔していることが丸わかりな蒔田さんに、クスクスと笑う。

城ヶ崎さんは、時々木島さんにこれと同じ注文をして、そして、木島さんが作ったカクテルを満足げに味わうんだ。

でも、それは木島さんという人が、客の気分を見分ける技を身につけてるからできることで、蒔田さんみたいに、まだ若い人には難しい注文らしい。

実はあたしも、おもしろ半分に木島さんに同じ注文をしたことがあるんだけど……。

チラッと彼を窺う。

「木島さんって、すごい人ですよ〜。見る目があるっていうか……」

それは、ここに来る度に思うこと。

温和な笑顔に柔らかい物腰。一見すれば優男が年取ったって感じだけど、この人の、人を見る目は確かだ。

……だって、あたしの性格、バレてる気がするもん。

蒔田さんもたぶんそうだけど、あたしの好みそうなお酒って、甘いのがっていうイメージがあるんだと思う。あたしだって、イメージに合わせて、多少なりとも甘いお酒を頼むようにしてるし。

……なのに。

木島さんにあたし好みを作ってもらうと、本当にあたし好みの、甘みなんてほとんどないようなあっさりとしたカクテルが出てくる。

ほんと、あなどれない人なんだよね……。

「そんなことはございませんよ。私よりもずっと素晴らしいバーテ
ンダーはたくさんいますし、蒔田くんも、きっと私を越えてくれる
と思います。それに……」

木島さんが、煙草を口にくわえた城ヶ崎さんをチラッと見てから、
あたしへニツコリと微笑む。

「今の私があるのは、城ヶ崎様のおかげですから。人を見る目があ
るのは、私よりも城ヶ崎様の方ですよ」

……やっぱり、木島さんにはバレてる。

あたしは、ひとつ息を吐いてから、木島さんにだけわかるように
小さくうなずいた。

「また木島さんがそんなことを……」

隣で照れてる城ヶ崎さんの方へ、心の中で『よしっ』と気合を入
れてから、いつものようにかわいい笑顔を心がけつつ、振り向く。

「あの……」

「ん？」

「あたし、城ヶ崎さんにおすすめのお店があるんですけど……」

いつもみたいに優しい笑顔で見つめ返してくれた城ヶ崎さんを、

あたしは久しぶりにドキドキしながら……“ かつちゃん ” へ誘った。

最近ずっと考えてた。

城ヶ崎さんは今までの男と違ったから。もしかしたらって……。

でも、期待して裏切られるのは嫌だったから、なかなか言い出せなくて。

……だけど、試してみたくて。

でも、木島さんのおかげで決心がついた。

ねえ、もし、もしよ？ 城ヶ崎さんが逃げ出さなかったら……。

あたし……。

あたし、は……。

5

……ああ〜もおっ！最悪！！

城ヶ崎さんとの約束の日。あたしにとっては決戦の日、の今日。

ちょっと緊張しながらも、暁に『がんばれ』と背中を押してもらって（何をどうがんばるのかわからないけど）、出かけた待ち合わせ場所です。

「ねえ、マジで俺らと遊びに行こうよ〜」

……ナンパされてます。

チャラチャラしたっていう表現がぴったりの、あたしよりも2つ3つ若そうな男2人に目の前を塞がれて、茶髪くんの方がグイッと身を乗り出して顔を近づけてくる。

ひょいっと軽く、その香水くっさい顔をよけて、あたしは困ったような顔を作った。

「でも、人を待ってるから……」

っていうか、待ち合わせじゃなくてもあんたたちみたいなのに興味はないけどね。

「さっきからずっと来ないじゃん？すっぱかされたんじゃないの？」

あいにくと、あんたたちと違って、城ヶ崎さんはそんなことしま

せん。

「少し遅れるって連絡あったし……」

例によって例のごとく、お仕事が長引いてるらしい。

またブーケ持ってくるんだろうなあ、あの人。今日はどんなのだろ？

そんなことを考えてたら、もう一人の金髪くんに腕を取られてしまっ、思わず顔をしかめた。

……気安く触んないでくれる？

思った以上に強引な行動に、どうやって腕を外そうか考えてると、金髪くんが、近くにあるカフェを指差す。

「じゃあ、その人が来るまでさ、そこでお話でもしない？」

しません。

「お、それいいじゃん。立ち話もなんだしさ、行こうよ？」

行きません。

さあさあと、人の腕を痛いほど掴む男たちに、ふつつつと怒りが込み上げてくる。

……ああ、もう。ほんっと、ぶんなぐってやりたいっ！

「あの、ほんとに困るっ……！」

周りの目もあるし、いつなんどきも油断大敵！な、あたしとしては、こいつらを殴るわけにもいかないし、とりあえず、目を潤ませしてみた。

どう？本気で嫌がってるでしょ？わかるよね？

「えー、ちょっとくらいいいしょ？ね？」

チツ、ダメか。

あー、もう、それなら……。

「やっ……！お願いっ、離して……！」

ちょっと大きな声を出してみました。

ほら、周りの視線一気に集中よ？どお？

さすがにこれは効いたみたいで、一瞬相手がひるんだ隙に、あたしが手を振り解こうとした、その時。

「連れを困らせないでくれるかな」

ひんやりとした低音の声とともに、あたしの肩がグイッとつかまれた。

聞きなれたその声にホッとするのと同時に、すっぱりとその人の腕の中に収まって、素敵！って見上げる。

そこには、城ヶ崎さんのかつこいい顔……が……。

……………。

……………こわっ！

城ヶ崎さん、目が、目が怖いっ！

「あ……えっと……」

明らかに自分たちよりも、背もレベルも高い男の、しかも背筋も凍りそうなほどきつい睨みに、さすがのナンパ男たちも顔が青ざめてる。

そして、互いに顔を見合わせると、今までのしつこさはどこへやら、彼らはそそくさとその場を後にした。

「麻由さん、大丈夫？」

男たちの後ろ姿を見送ってから、今度はおそろおそろ顔を上げたあたしに、腕を下ろした城ヶ崎さんが、さっきとは打って変わった優しいまなざしを向けてくれた。

その見慣れた視線にホッとする。

「はい、大丈夫です！早かったんですね？」

「うん、まあ……。でも、遅刻は遅刻だから。芸がないけど、これお詫び……」

にっこりと、うれしさをにじませるように微笑んだら、城ヶ崎さんが、そう言ってブーケを差し出した。

今日のはオレンジ。

「ありがとうございます！今日のもかわいい〜！」

気にしないでいいのについて思うけど、これが城ヶ崎さんなりの誠意なんだって思うから、いつも素直に受け取ることにしてる。

そういうまじめなところ、嫌いじゃないし……。

まあ、また花瓶が増えちゃうけど、お母さんも喜ぶし、いつか。

「それより、麻由さん。さっきのようなことは、よくあるの？」

城ヶ崎さんがそう言って、顔をしかめた。

あたしも、困ったように小さく笑う。

「たまに……」

嘘です。しょっちゅうです。

「あ、でも、ついて行ったりなんてしませんよ？」

「それは僕も、麻由さんはそんなことしないと思っているけど……」

城ヶ崎さんに即答されて、ちょっとうれしくなる。

「でも、ああいう輩^{やから}には、もっとちゃんと拒絶した方がいい。今は僕が間に合ったからよかったけど、誰も助けてくれなかったら、どこへ連れて行かれるかわからないから……」

まあ、最悪な事態になりそうだったら、大声出すし、殴ってやれば逃げてくとは思うんだけど。

でも、そんなこと言えないから、心配そうに見つめてくれる城ヶ崎さんへ、ちよつとだけ困ったように微笑んでから、うなずいた。

「がんばって、みます」

でも、そう言ったあたしに、城ヶ崎さんは何か考え込むように黙ってしまふ。

……まただ。

最近、城ヶ崎さん、こういうことがよくあるんだよね……。

あたしが何か変なことを言ったのかなって考えるんだけど、思い当たらないし、すぐにいつもの笑顔に戻るから、気のせいかもしれないけど……。

「城ヶ崎さん？ どうかし……え!？」

気になって城ヶ崎さんの顔を覗きこんだら、突然さつき金髪くんに掴まれていた方の手がギュツとつながれて、驚く。

つながれた手を見て、もう一度城ヶ崎さんを見上げれば、そこに

は少し照れて赤くなった顔があつて。

「麻由さんが、誰かに連れ去られないように……」

……城ヶ崎さんと一緒にいるのに、連れ去られたりしないし。

心の中で突っ込むのとは裏腹に、彼につられるようにあたしの頬も熱を持つ。

手、つないだだけじゃない。落ち着け、あたし！

「じゃ、行こうか？」

「……はい」

結局、あたしたちは“かっちゃん”に着くまでずっと、つないだ手を離さなかった……。

「……？」

『かっちゃん』へ案内して、とうとう破れてしまったのれんの前へ立った時に城ヶ崎さんが言った言葉は、他のどの男とも同じだった。

でも、おそろおそろ見上げた先にあつたのは、ひきつった笑みではなく、ちよつと驚いたって感じの顔で。

……ドキドキが、大きくなっていく。

「ちょっと小汚く見えますけど、いいお店なんですよ」

できるだけ明るく言って、店の戸を開けた。

「こんばんはあ」

「おっ！麻由ちゃん！」

店に入ると、常連のおじさん達がいて、それぞれにあたしに声をかけてくれて、あたしもそれに笑顔で答えた。

木村のおじさん達の視線が城ヶ崎さんに集まって、ニヤニヤと笑う。

……でも、今日はちょっと違うのよ。

「らあっしやい！……今日はお連れさんが一緒かい？」

叔父さんが威勢のいい声をあげて、いつもみたいにニヤッて共犯者の笑みを送ってきたけど、今日はそれにあいまいに笑みを返しておく。

どうやら、それだけでなんとなく察しはついたみたいだけど、叔父さんはあたしと一緒に入ってきた城ヶ崎さんをいつものようにギロツと睨んで迎え入れた。

……どういう状況であれ、睨んでおくのね？

「こんばんは」

だけど、城ヶ崎さんはそんな叔父さんの睨みに、まったく動じることなく笑みを返し、あたしがすすめたテーブル席に腰掛けた。

当たり前よね。

……城ヶ崎さんの睨みの方が、絶対怖いもの。

そんなことは知らない叔父さんが『おっ?』と意外そうな顔をするのが見えた。常連さん達も興味深そうにこっちをチラチラと窺っている。

そんな中で、城ヶ崎さんは、妙にまじめな顔で店内を見まわしていた。

……やっぱり、ダメかな? この店、イヤ?

「ふうん……なるほど」

へ?

「確かに古い建物だし、のれんも破れていたし、小汚く見えがち……でも、中はきれいに掃除が行き届いているし、マスターも顔はこわいけど、清潔感があるし……」

……………。

……………。

「えっと……城ヶ崎さん?」

キヨロキヨロと視線を動かしながら小さくつぶやく城ヶ崎さんを、思わずポカンと見つめてしまってから、小さく名前を呼ぶと、彼がハタと我に返る。

そして、店内全ての視線が自分に集まっていることに気づいて、『しまったな』と苦笑した。

「ごめん。つい、新しい店に入ると、癖で……」

あたしに向かって小声で謝りながら困ったように顔を撫でる城ヶ崎さんは、まったくいつもの城ヶ崎さんで……。

あたしは、口元が緩んでしまうのを止められなくて、クスクスと笑ってしまう。

どうしよう。

……すごくうれしい。

「はいよ！」

叔父さんが威勢のいい声と共に、お冷とお通しのレンコンの炒め物、おしぼりを渡してくれる。それらを受け取って、生ビールと梅酒を注文したら、叔父さんが去り際にあたしにだけ、意味ありげなニヤニヤ笑いを残していった。

もうっ……！

なんとなく照れくさくて、叔父さんを軽く睨む。

「麻由さんは、よくここへ？」

おしぼりで手を拭きながら、城ヶ崎さんにいつもと変わらない笑みで聞かれて、あたしがうなずこうとした瞬間……。

「おうよ！麻由ちゃんはこの店のアイドルなんでえ！」

……柿田のおじさん。もう、酔ってるね？

人の会話に勝手に割り込んできた常連さんに、城ヶ崎さんの目が驚きで大きくなる。

さらに何か言おうと常連さん達が口を開く寸前、あたしは彼らにとびきりの笑顔を送った。

「やあだ、柿田のおじさんったら、もう……」

余計なことは言うなよ？わかってるよねえ？

とりあえず、かわいこぶりながらも、目で常連さん達に訴えておく。

あたしが求めるのは、この店から逃げない男であって、あたしの本性までバラす必要はないんだからね？

彼らがその視線の意味に気づいて一瞬固まり、そして各々、城ヶ崎さんにわからないように、こっそりと親指を立てて、『了解』とうなずいた。

よし。

「驚かせてごめんなさい、城ヶ崎さん。おじさん達はこのお店の常連さんで、あたしのこと、かわいがってくれてて……。ちょっと怖そうですけど、とってもいい人たちなんですよ？」

城ヶ崎さんへ常連さん達を紹介してから、ニッコリと説明しておく。

彼らを紹介したのは、城ヶ崎さんで2人目だ。

1人目は、紹介した時すでに逃げ腰だったけど、城ヶ崎さんは、叔父さんに対したときとかわからない笑みでもって、『城ヶ崎です』と、さわやかに自己紹介をやったのけた。

さすが……。

「ほらよ！生と梅酒！」

叔父さんがテーブルへ、頼んでおいたビールと梅酒をドンっと置く。

相変わらず、愛想のかけらもないっただら……。

「あ、そうだ。城ヶ崎さんって嫌いなものは特になかったですよね？」

「ああ、うん。なんでも好きだよ。おいしいものであれば」

『任せるよ』とうなずかれて、あたしは叔父さんを見上げた。

「じゃあ、お任せコースで」

叔父さんがフツと笑ってから、『はいはい』って、客に対する返事とは思えないものを返して、キッチンへと帰っていく。

お任せコースなんてものはないんだけど、叔父さんの好みでその日のおいしいものを出してもらうんだ。

「……ん！」

軽く乾杯をした後、お通しの炒め物を口にした城ヶ崎さんから小さく声が漏れた。

顔を上げれば、おいしいものを食べている時に彼が見せる、幸せそうな顔がそこにあった。

うんうん。おいしいでしょ？叔父さんの料理って。

城ヶ崎さんの笑顔に、こっちまでうれしくなってしまう。

「串盛りと、五目煮」

今日城ヶ崎さんが遅れた理由なんかを聞きながらチビチビ飲んだら、叔父さんがさらに料理を運んでくれた。

「……さて、と」

目の前にさらに並べられた料理に城ヶ崎さんが一瞬目を輝かせて、そして、なぜかおもむろにスーツの上着を脱ぎ出す。

「じ、城ヶ崎さん？あの……」

何する気？

さらにネクタイも緩めて、すっかり居酒屋のサラリーマンみたいな格好になった彼が、あたしへニコツと笑う。

「こういうくつろいだ雰囲気のお店には、堅苦しいスーツは必要ないから。場の雰囲気にあわせるのも料理を楽しむコツだよ」

そう言ってビールを飲む城ヶ崎さんを、ポカンと見つめてしまう。

「くつろいだ店……」

あたしが連れてきた男の中で、この店のことをそう言った人は、もちろんこの人が初めて。

……しかも、本当にくつろいじゃってるし。

あたしが箸を持ったまま、ポケットと城ヶ崎さんを見てる間、彼は串焼きを一本食べるたびに、『ん！』だの『ん〜！』だの本当においしそうに声を上げていた。

「はいよ！刺身盛り合わせ。……うまいか？」

新しい皿を持ってきた叔父さんが、おもしろそうに城ヶ崎さんを見下ろすと、城ヶ崎さんがパツと顔をあげる。

そして、目を輝かせながら大きくうなずいた。

「ええ！おいしいですね、実に。串焼きはタレが甘味といい辛味といい絶妙で、クセになります。こんなおいしいタレは初めてですよ。あと、つくねは軟骨のコリコリ感がたまりませんね。大葉も香りがいいし。五目煮も見た目良し、味良し。文句の付け所がありません。マスターは本当に腕がいい！それから……」

叔父さんの料理を次から次へと真剣に絶賛していく城ヶ崎さんに、叔父さんの目が驚きで丸くなる。

そして、あたしと顔を見合わせてから、再び城ヶ崎さんに目を向けた叔父さんは。

「ククッ……わあっはっはっは！」

……盛大に嘖き出した。

突然笑い出した叔父さんに、呆氣に取られたのは城ヶ崎さんだけで、いつの間にやら常連さんも一緒になって笑ってるし、あたしはあたしで口元が緩むのを止められずにいた。

「いやあ、気に入った！うん、麻由！俺は気に入ったぞ！」

「へ？」

まったく状況が飲み込めてない城ヶ崎さんが、彼には珍しい間の抜けた声を出す。

も、もう、叔父さんってば……。

あたしと叔父さんを交互に見つめては首を傾げる城ヶ崎さんに、常連さん達がビール瓶片手にやってきて、勝手に彼のジョッキにそれを注ぎだす。

ああ……。

「あんた、いい男だねえ。うんうん。まあ、飲め飲め」

「え？は、はあ……ありがとうございます……？」

とりあえず注がれたビールに口をつけた城ヶ崎さんに、あたしは叔父さんを手で示してから、ニツコリと微笑んだ。

「びっくりさせちゃってごめんなさい。この人、あたしの叔父なんです」

「叔父さん……？」

「はい。各務勝也っています。マスターなんて洒落た名前似合わないから、大将って呼んであげて下さいね？」

「こら。似合わないとは何だ、似合わないとは」

あたしを小突いた叔父さんに、へへとかわいく笑えば、いつもと違うその反応に叔父さんの片眉があがった。

つきあえよ。と目で訴えれば、叔父さんがあたしの頭をポンポンと撫でる。

それでいいのよ、それで。

「なるほど。どおりで仲が良さそうだと……」

そう言っとうなずいた城ヶ崎さんに、また木村のおじさんがビールを注ぎ足す。

「この、かっちゃんがあ、姪バカってやつでよろ。麻由ちゃんの男は俺の認めた奴じゃなきゃいかくん、言うてよろ……」

「うるっせえな。余計なこと言ってんじゃねえぞ、親父さん」

木村のおじさんがニヤニヤと酔っ払った顔で言うのを、叔父さんが顔を赤くして睨んだ。

でも、木村のおじさんはそれをまったく気にした様子もなく、城ヶ崎さんの肩をバシバシと勢いよく叩いて、笑う。

……城ヶ崎さん、痛そうなんだけど。

「ひゃっひゃっひゃ！ 今日はいいい日なあ、かっちゃんよお！ ……よおっし、酒だ酒え！ 飲んで飲んで飲もうやっ！」

「おゝ！」

木村のおじさんの掛け声に、柿田のおじさんと山川のおじさんも声を上げて、まだよく状況を飲み込めていない城ヶ崎さんを巻き込んだどんちゃん騒ぎが、幕をあけた……。

……あゝあ……知らないからね、もう……。

叔父さんが持ってきた酒を見て呆れつつも、あたしの心の中は、ほっこりと暖かくて。

ずっと、顔が緩みっぱなしだった。

「すみません、しばらくここで待っててもらってもいいですか？」

「ああ、いいですよ。なんなら、お手伝いしましょうか？」

意識してかわいくお願いしたあたしに、鼻の下を伸ばしつつ了承してくれたタクシーの運転手の申し出を笑顔で断って、ちよつと足取りのおぼつかない城ヶ崎さんの腕を支えてマンションへ入る。

「大丈夫ですか？ 気持ち悪くないですか？」

「ああ、うん……。大丈夫。結構、意識ははっきりしてるつもりなんだけど……。ごめん」

「いえ、こっちこそごめんなさい。あたしが止められれば良かったんですけど……」

あの後、あたしが止める間もなく、気づけば城ヶ崎さんは常連さん達によって、すっかり酔わされてしまっていた。

暗証番号を打ち終えた城ヶ崎さんと一緒にエレベーターへ乗り込むと、彼が壁にもたれて大きく息を吐いた。

こんなに酔ってる城ヶ崎さんを見たのは初めて……。 “COCO on” でも酔わないし。お酒強いみたいだし。

「麻由さんこそ、大丈夫？」

「はい。あたし、あんまり飲んでなかったし……。こうみえて、割とお酒には強いんですよ？」

嘘です。割とどころじゃなく、とんでもなく強いです。

実は、今日もこっそりと城ヶ崎さんと同じ位の量、飲んでました。……気づいてないみたいだけど。

「はは。それは、心強いね」

エレベーターが止まって、城ヶ崎さんがもたれていた体を起こす。

あたしはまた彼を支えながら部屋までついていった。

……ちょっと、ドキドキしながら。

「お邪魔します……」

電気をつけて中へ入っていく城ヶ崎さんの後ろを、小さく挨拶してからついていく。

……広い。

さすがに広い。暁のマンションも小説家のおじいさんから譲り受けたとかで、一人で暮らすには広すぎると思ったけど、ここはそれ以上。

さすが、社長。

片付けてあるっていうより、置いてある物が少ないって感じのり

ビングのソファに、城ヶ崎さんがドカツと座って、天井を見上げた。

「大丈夫ですか……？ 今、お水持ってきますね」

城ヶ崎さんの横に、皺にならないようスーツを引っ掛けて、勝手にキッチンへお邪魔する。

「ごめん、麻由さん。冷蔵庫に……」

後ろから追いかけてきた声に従って冷蔵庫を開けると、隙間だけの庫内に、アルコールとミネラルウォーターが並んでいた。

そこからミネラルウォーターを取り出して、手近においてあったグラスへ注ぐ。

それを持っていくと、『ありがとう』と受け取った城ヶ崎さんが、一気に飲み干した。

「はあ……。なんか、生き返った……」

冷たい水で頭が冴えたのか、城ヶ崎さんがそう言って大きく息を吐き出す。

「ふふ。それは、よかったです」

空いたグラスを受け取って、一応それを元あった場所に片付けておく。

「……ありがとう、麻由さん」

「いえ。……えっと。じゃあ、あたし、帰りますね」

「ああ、うん……」

キッチンから戻って、バッグを手にそう言うと、城ヶ崎さんも立ち上がって玄関まで見送ってくれる。

……もしかしたらこのまま……なあってことも思ったけど。城ヶ崎さん、酔ってるし？

でも、やっぱり城ヶ崎さんは紳士ってことかな。

玄関で靴を履いてから振り返ると、城ヶ崎さんがいつもみたいに優しく微笑む。

「今日は楽しかった。ありがとう」

なんとなく名残惜しいような気持ちを、少し酔ってるからだとか心の中へ押し込めて、あたしも微笑み返した。

「こちらこそ。でも、かえって迷惑かけちゃったみたいで、ごめんなさい」

「いや、本当に楽しかったから。料理はおいしかったし、皆楽しい人達だったし。麻由さんは、いい人達に囲まれているんだなあ……」

いい人……。

叔父さん達をそんな風に言ってもらえるなんて。

自然と口元が緩む。

「はい、そう思います……。城ヶ崎さんがそう言ってくれて、すごくうれしいです。あたし、叔父さん達のこと、大好きだから……」

本当に、うれしい。

そう思って、城ヶ崎さんをニツコリと見上げた。

「……………」

「？」

急に黙ってしまった城ヶ崎さんへ、首を傾げる。

なんか変なこと、言っちゃった？

「あ、あの……きゃ!？」

とりあえず、沈黙に困って何か言おうとした時、だった。

ぐいっと腕が掴まれた、と思ったら、あたしの体が城ヶ崎さんにすっぽりと抱きしめられて、驚く。

え? え?

「城ヶ崎さ……?」

「……君は笑うかもしれないけど、僕は、大将や木村さんたちに嫉

妬してる」

「え？」

なんで？って、顔を上げたら、情熱のこもった目で見つめられて、動けなくなる。

その目はダメ、なのに……。

体が熱くなって、鼓動が速くなっていく。

「麻由さん……」

「……んっ……」

城ヶ崎さんの唇が、ゆっくりと降りてきて、そっとなじみあうようにキスを落とす。

何度も、角度を変えて優しいキスが降ってきて……。

城ヶ崎さんのシャツを掴む手に力を込めたら、今度は深く、唇が重ねられた。

……長い、長いキスの後、ギュッと再び抱きしめられて。

優しいキスにしびれさせられた体に、その腕の中はとても心地よくて……。

「好きだ。堪らなく、好きなんだ……」

耳元で囁かれた甘い告白に、もっとって、彼の背中に腕を回そうと、手を伸ばす。

もう、このまま……。

そんなあたしに、城ヶ崎さんは、さらに言葉が続けた。

「君の全てが、愛しい……」

「！」

……本当なら、うれしくて飛び上がってしまう、そんなセリフ。だけど。

その言葉に、あたしの、背中へ回そうとしていた手が、止まった。

一気に体の熱が引いていく。

「麻由さん、僕じゃダメだろうか？ 君の……」

「城ヶ崎さん」

更に続く告白をさえぎって、彼の胸を軽く押すように離れる。

「麻由、さん……？」

彼の少し驚いたような声に、うつむけていた顔を、精一杯の笑顔を浮かべながら上げた。

……お願い。うまく笑えてて。

「すごく、うれしいです。でも……少し、お時間をくれませんか？」

「え？」

「あの、タクシーも待たせてあるし、あたし、帰りますね！」

「え！？麻由さ……！」

ごめんなさいって言いながら、飛び出すように扉を開いて外へ出たら、城ヶ崎さんの声が後ろから聞こえてくる。

「麻由さん！……また、連絡するから！」

その声に振り返って笑顔でうなずくと、急いでエレベーターへ乗り込んだ。

「……サイテー」

エレベーターの扉が閉じると同時に口から漏れたのは、そんな言葉だった。

サイテー、サイテー、サイテー！

……なんで『あたしも好きです』って言えなかったの？

そう言って、体を預けてしまえばよかったじゃない。

そうなんてもいって、そうならいいって、心のどこかで望んでいたんじゃないの？

そうすれば、お金持ちで頭も良くて顔もよくて、“かつちゃん”も受け入れてくれた、最高の男が手に入ったのに。

あたしが求めてた、誰にでも自慢できるような条件のいい男が手に入ったのに。

『君の全てが愛しい』

彼の言葉が耳にこびりついて離れない。

あたしの、全て。

……でも、彼の知ってるあたしは、‘本当のあたし’じゃない。だから、彼の愛するあたしも、‘本当のあたし’じゃない。

そんなの、わかってた。

わかってた、つもりだった。

《無事についたら、連絡を下さい》

タクシーに乗ってる時、城ヶ崎さんからそんなメールが届いた。

あんな風に逃げたあたしに、他にも言いたいことがたくさんあるはずなのに、たったそれだけ……。

『無事についたら』

その言葉に込められた優しさに、涙が出そうになった。

……こんなはずじゃなかったのに。

こんなに好きになるはずじゃなかったのに。

‘本当のあたし’を愛してくれる人じゃなきゃ、愛せない。そう、思ってた。

だって、そうじゃなきゃ、つらいから。悲しすぎるから。

‘本物’が‘作り物’に嫉妬するなんて。

馬鹿みたい……。

7

あの日から2週間が経った。

来週から教育実習生が来るということで、今年は一人受け持つことになったあたしは、暁と一緒に、それなりに忙しい時間を過ごしていた。

城ヶ崎さんも忙しいらしくて、時々電話で話したりメールしたりするくらいで、会えない日が続いてた。

でも、そのおかげで、気持ちの整理がついた。

城ヶ崎さんを受け入れようって。

だって、本当の自分を隠して、外見どおりのかわいい女を演じることを決めたのは、あたしだし。

その結果として城ヶ崎さんっていう極上の男を捕まえることができたんだから、大収穫なわけで……。

だから、予想外にあたしが彼を好きになってしまったからって、彼に本当のあたしごと受け入れて欲しいなんて、調子のいいこと望むのは、欲張り過ぎだもの……。

そろそろ城ヶ崎さんに、ちゃんと返事をしなくちゃって思い始めた頃のことだった。

……なんだか、城ヶ崎さんの様子がおかしくなってきたのは。

《今、何してる？》

初めは、そんなメール。

今まで、城ヶ崎さんから仕事中にそういうメールがくることはなかったけど、気にしてくれてるんだと思ったくらいだったし、あたしは普通に返事をした。

……でも。

それから毎日そんなメールが一日に何回か入るようになって、電話も頻繁にかかってきて。

なんか、あまりに城ヶ崎さんらしくないその様子に、あたしの中で、徐々に違和感が増していく。

最近会えないから、さみしがってる、とか……？

おかしいなって思いながらも、そのうちに教育実習が始まって、あたしのところにも、井上君という体育会系のさわやか青年がやってきて、あたしはまた少し忙しくなった。

……そのうえ。

「各務先生、今日の夜とか、時間ありますか？」

「いい飲み屋、知ってるんですよ。一緒に行きませんか？」

「お昼を一緒に……」

……うっとうしい。

あんた達は一体ここへ何しに来てるのって、突っ込みたくなるくらい、入れ替わりに実習生の男の子達が自分を売り込みにやってくる。

残念ながら、年下にも大学生にも興味はない。だから、もちろん、適当にかわしてるんだけど。

あたしには、城ヶ崎さんもいるんだし……。

「どうした、麻由？」

いつものように自分の弁当を持って、暁のいる図書準備室へとやってきたあたしが、思わずホッとしてため息をつくとき、自分の担当実習生と楽しげに話をしていた彼女が顔を上げて、一瞬表情を曇らせた。

「んー、ここは落ち着くなあと思って」

「？」

「ああ……大変そうですもんね、各務先生」

意味がわからずに首を傾げた暁に代わって、彼女の担当実習生の

もとみやゆき
元宮幸紀君が、そう言った。

元宮幸紀、か……。

「……………」

「……な、なんですか？」

突然じいっと見つめたあたしに、元宮君が身を引く。

元宮君は、男にしておくのはもったいないって表現されるくらい、すっごくかわいい顔をしてる。

そんな、女子高生達からも実習生ランキング堂々の第2位をちよ
うだいしちゃうくらい見目麗しい彼は。

……暁のことが、好きらしい。

よく暁のこと見てるし、暁と話してる時は顔が輝いてるし。

「あ、あの……僕、お昼済ませてきますね？」

今度はニコニコと微笑みかけたあたしから逃げるように、元宮君
が暁にそう言って準備室を出ようとする。

「ああ、うん。いつてらっしゃい」

まったく彼の気持ちに気づいてない暁が、ニコリとそう言うと、
その笑顔を向けられた元宮君の顔が締まりなく緩んだのを、あたし
は見逃さなかった。

おゝ、おゝ、べたばれだねえ。ムッフ。

「どうしたんだ？元宮君があまりにかわいくて、見とれたのか？」

元宮君が扉を閉めて出て行った後、暁がお弁当を取り出しながら、ニコニコとあたしに聞く。

あたしは呆れて、肩をすくめた。

「あのねえ……。暁じゃあるまいし、そんなわけないでしょ」

かわいいもの大好きな暁は、元宮君が内心大のお気に入りなんだよね。

だから当然、彼のことを暁もよく見てるはず、なんだけど……。

「……何で気づかないの？」

彼が、あれだけあからさまに好意を持って接してるのに。

「何が？」

いつものように隣に並んで座ったあたしに、暁が首を傾げる。

……元宮ゆっきー。可愛いそうに。

暁のあまりな鈍さに、内心元宮君に同情しつつ、『なんでもない』ってごまかしとく。

とりあえず、元宮君が暁を任せるに値する男かどうか、見極めなくっちゃ。

叔父さんじゃないけど、あたしが認めた男でなきゃ、暁はあげないんだから。

「そういえば、最近疲れた顔をしているようだけど、大丈夫か？さつきもため息をついていたし……」

お弁当を広げて、つい、またため息をついてしまったあたしの顔を、暁が心配そうに覗き込む。

鈍い暁にまでわかるくらい疲れた顔してるんだ？あたし……。

「ん……。ちょっとね、実習生くんたちのラブ光線に攻撃されまくりでさ」

「へえー！さすがアイドル教師だなあ」

本気で感心して目を丸くする暁に、適当に『まあね』って笑つく。

……違うんだ、ほんと。あたしが疲れてるのは実習生達のせいもあるけど、それだけじゃなくて。

「あのね、暁……」

暁に聞いてもらおうかなあって、そうしたら少しは楽になれるかなって、そう思って口を開いた時。

ポケットに入れた携帯電話が、ブルブルと振動した。

……噂をすればってやつ？

表示された着信名は、城ヶ崎直人。

「外へ出ていようか？」

気を使って箸を置いて立とうとした暁を止めて、あたしは急いで部屋を出た。

「……もしもし？」

誰もいないのを確認してから通話ボタンを押すと、廊下からベランダへ出る。

小雨がぱらつく中、濡れないようにしゃがみこんだ。

校内で携帯電話を使用するのは控えるように言われてるから、誰にも見つからないようにっていうのもあるんだけど。

<やあ。今、お昼休みだね？何してた？>

あたしの大好きな心地よい低音が耳に響くのに、どうしても心が弾まない。それでも、出来るだけ明るく聞こえるように気をつけて言う。

「暁と、お弁当食べてました。城ヶ崎さんは？お仕事大丈夫なん

ですか？こんな時間に……」

＜ああ、うん。少し時間ができたから、君の声が聞きたくなって……＞

……その言葉はうれしいんだけど。うれしいはず、なんだけど。

昨日も電話してるし、今日だって何回もメールしてるのに。

思わず出そうになったため息を、必死で堪えた。

「こんな声で良かったら、いくらでも……」

＜それに、また君が大学生に絡まれてるんじゃないかと思ったし＞

『どうぞ』って笑おうとしたのを遮って言われた、少し嫌味混じりの言葉に、口元が引きつった気がした。

……ああ、やっぱり。そのことですか。

それというのも、昨日のこと。

城ヶ崎さんから電話があった時、ちょうどあたしのところに瀬古^{せこ}っていう実習生が口説きに來てて。

あたしは、これみよがしに電話に出て、瀬古に『お呼びじゃないの』ってどこをみせたつもりだったんだけど、あの野郎、『じゃあ、先生。また後で』とか、わけわかんないことを、城ヶ崎さんにも聞こえるように言ってから出て行きやがった。

……確かに、顔だけはいいい男だから、自分に自信があるのかもし
んないけど！高校生からきゃーきゃー言われて、調子に乗ってんじ
やないわよ！

余計なことをしてくれちゃって、城ヶ崎さんの束縛が強くなっち
やったじゃない……。

……瀬古にも、城ヶ崎さんにもイライラする。

「大丈夫ですよ？あれは、実習生の子がふざけただけだし……」

<そうかな？僕にはそうは思えなかったけど……>

……何が言いたいのか？あたしと瀬古の間になんかあるとでも？

城ヶ崎さんの言い方に、さらに胸の奥がむかついてきて、それで
も必死にそれに耐えれば、電話の向こうから『社長、そろそろ……』
っていう秘書か誰かの声が聞こえてきた。

女の声が。

<わかった、今行く。……どうやら、タイムリミットらしいよ、麻
由さん。また連絡する>

「あ……はい。がんばってくださいね」

<ああ。……ごめん>

プチって通話が切れて電話を耳から離したら、それを投げつけた
くなる気持ちをぐっと押さえて、ただ握り締めた。

「なによ……!」

……自分だって、秘書だかなんだか知らないけど、女の人と一緒になんじゃないっ! なんであたしばかり嫌味言われなくちゃならないわけ!?

第一、あたし達、まだ、ちゃんと恋人にもなってないのに! なんてこんな縛られなきゃならないの? キスしたくらいで、独占欲強すぎじゃない!?

声に出して叫べない分、電話を握り締める手に力が入る。

「城ヶ崎さんの、バカ……」

この前までの優しい城ヶ崎さんはどこへ行っちゃったの?

こっちが本当の城ヶ崎さんなの?

「もう、わけわかんない……」

……完璧な男なんていない。城ヶ崎さんの欠点が、独占欲の強さだというなら、受け入れなきゃいけないのかもしれない。

だって、彼は“かっちゃん”を受け入れてくれたもの。

……でも。

またひとつ、ため息がもれた。

それから毎日、そんな感じで電話とメールがきて。

日に日にひどくなってる気がするそれに、どうしようもなく城ヶ崎さんにイラつかされる日が続いて……。

その度に、心のどこかに、おもりが堪っていくような気がしてた。

……そして、とうとう、その時はやってきた。

土曜日の今日。城ヶ崎さんとは会えそうになかったし、今は会いたくない気持ちもあったから、暁をご飯に誘った。

そこで暁に少し愚痴っちゃおうかなって思ってたんだけど、ちょうどそこに居合わせた井上君が『いいなあ』って言い出したもんだから、元宮君とあと2人、実習生の女の子を誘って、結局、皆で飲みに行くことになってしまった。

まあ、結果として、楽しい面子がそろった飲み会はかなりの盛り上がりを見せて、いい気晴らしになったんだけど。

途中で城ヶ崎さんからまた『何してる』メールが入って、うんざりした気持ちのまま、これみよがしに『実習生の子達と飲んでます』って返してやった。

その矢先に、女の子たちが、

「彼氏ですかあ？」

とかって聞くから、

「ううん。ただの友達」

って、笑顔で否定してやったわよ。

その後、井上君が、お酒のせいか緊張のせいかわからない真っ赤な顔で愛の告白してきたのにも、『ごめんなさい』したけど。

飲み屋の後、女の子達の希望でカラオケへ行くことになって、そこでもメールがきたから、おもいきり楽しんでるぞっていう感じのを送っておいた。

……大分、自分を装えなくなってるなって、思ってた。

「さっきの先生、マジでかっこよかったー！」

カラオケから出たら、実習生の阿部^{あべ}さんが、暁の腕に捕まって、目を輝かせて言った。

それというのも、さっき女の子たちが、化粧室から出てきたところで酔っ払いに絡まれたのを、暁が、ひと睨みで蹴散らしちゃったからで。

「でも先生、ああいう時は、僕たちの出番でしょう？」

「そうそう。俺たちの立場は！？みたいな……」

元宮君と井上君に、ジトツと恨みがましい視線を向けられた暁が、苦笑気味に『ごめんごめん』と謝ってる。

そんな彼女は、まったくもっていつも通りなんだけど……。

「この後、どうします？あたしは、まだまだ大丈夫ですけど」

あたしと同じくらい酒豪かもしれない香田こうださんが、そう言って皆を見回す。

あたしもまだまだ全然大丈夫だけどねえ……。

チラッと暁を見上げると、いつもとほんのすこしだけ違うその顔と目があった。

……酔ってるね、完全に。

腕時計に目をやれば、わかってたけど、もうとっくに日付が変わってる。

「もうこんな時間だし、あたし達は帰るよ。いいでしょ？暁」

「ん」

同意を求めると、暁がコクツとうなずいた。

「「え」」

赤い顔をした阿部さんと井上君の二人から抗議の声があがったけど、『ごめんね』って笑みを浮かべて、近くにいるタクシーへ歩こうとした時、だった。

軽いクラクションの音が聞こえて、何気なくそっちへ視線を移したら、そこに見覚えのある高級車が止まってて。

……忙しいんじゃないかったわけ？

「どうした？」

「ん……。知り合い。ごめん、ちょっと行ってくるね」

無視することもできなくて、暁にそれだけ言うと、車に近づいた。助手席側の窓が開いて、少しイラついた顔の城ヶ崎さんがこっちを向く。

「どうしたんですか？お仕事で帰れそうにないって……」

徹夜になるかもとか言ってなかったっけ？

「ああ、少し抜けてきたんだ。……ずいぶん楽しそうだね？」

嫌味な言い方……。

確かに楽しかったけど、その気分が冷めていく。

「もう帰るんだろう？送るから、乗って」

何も言わないでいたら、城ヶ崎さんがそう言って、一方的に助手席のドアを開けようとする。

あたしは、慌ててそれを止めた。

「あ、でも、暁が酔っちゃってて……。一緒に帰らないといけないから……」

すっごくわかりにくい酔い方だし、あたし以外の誰も気づいてないけど、暁はすっかり酔っちゃってる。

普通の酔っ払いならタクシーにでも押し込んでしまえば問題ないかもしれないけど、暁の場合、酔うとある悪癖が出ちゃうもんだから、連れて帰ってあげないとまずいんだ。

今日酔っちゃってるのは、それを知ってるあたしがいるって安心してのことだってわかってるから、あたしが責任をもって暁を送っていつてあげないといけないわけだけど……。

「暁さんなら、他の人に送ってもらえばいい。なんなら僕が送るけど?」

城ヶ崎さんの申し出に、即座に首を振る。

……暁の悪癖が、城ヶ崎さん相手に出たらどうするのよ、ねえ。

結局、押し問答のすえ、まったく引いてくれない城ヶ崎さんに諦めて、彼をちょっと待たせておいた。

「元宮君、ちょっといいかなあ?」

あたしたちのことを興味津々見つめていた実習生たちから、元宮君だけをチョイチョイッと手招きする。

「なんですか……？」

なんで自分が呼ばれたんだろうっていう疑問が丸わかりな彼に、ニッコリと微笑んだ。

「元宮君、暁と家近かったよね、確か。暁のマンション、わかる？」

「え？はあ……。知ってます、けど。あのでかいマンションですよ？僕のアパートから歩いて5分くらいだって、先生と話したことあるんで……」

「じゃあ、オッケー。悪いんだけど、あたし、あのひとちょっと話があつて。……元宮君が、暁、送ってくれない？」

「え！？送るって……」

あたしの言葉に、元宮君が目丸くして、少し顔を赤らめた。

フッフッ。

「うん。暁ね、全然そうは見えないと思うんだけど、あれ、かなり酔ってるんだ。本当はあたしが一緒に帰ってあげるつもりだったんだけど……。元宮君に任せていい？」

「え？酔ってる……？」

元宮君が不思議そうに、後方で女の子たちと談笑してる暁を振り返って首を傾げた。

うん、その気持ちはとくともよくわかる。あたしだって、暁が酔ってるかどうか見極めるのにかなり時間かったもん。

「お願いしてもいいかなあ？」

「……わ、わかりました。僕がきちんと筑茂先生を送り届けます」

「ありがと！じゃあ、よろしくね。……ああ、そうそう」

「？」

しっかりとうなずいてくれた元宮君にニコッと笑って、彼をジッと見つめた。

「暁、本当の本当に酔ってるから。気をつけてね？……忠告はしておくわ」

そう言ったあたしに、元宮君はまた首を傾げてから、うなずいた。

「わかりました。大丈夫です」

絶対、意味わかってないんだろうなあって、勘違いしてるなあって、それわかって彼に言ったあたしもあたしだけど。

ここ数日、彼を観察してて、元宮君になら暁を任せてもいいかもって、あたしはそう思ったから。

暁の悪癖が彼相手に出るなら、それはそれでいいのかもって。

あとは、暁次第。

「……がんばれ」

あたしは元宮君にそう言って、しきりに首をひねる彼にクスツと笑った。

そして、大きく深呼吸してから、城ヶ崎さんの車へ乗り込んだ。

……あたしも、がんばらなくちゃ。

「……彼と何を話していたの？」

車が動き出してから、長い沈黙が続いた後。前を見つめたまま、こっちを見ようともしせずに、城ヶ崎さんが不機嫌そうな声で言った。

思わず、小さくため息を吐き出してしまう。

色々思うところはあっても、やっぱり久しぶりに会えたことをうれしく思っていた気持ちが、萎んでいく。

「……暁を送ってもらうように、頼んでたんです」

「へえ。……それにしては、長かったけど」

「そうですか？」

「ああ。……僕としては、あまり他の男と話さないで欲しいな」

……冗談でしょ？どこまで独占欲強けりゃ気が済むの？

そもそも城ヶ崎さんが身勝手なことをするから、あたしが元宮君にお願いすることになったって、わかってる！？

「ほんとは、あたしが暁を送っていくはずだったんです。そう約束してたし……」

もう、イライラした態度を隠せなくなって、城ヶ崎さんへの言葉にもトゲが混ざる。

なのに、城ヶ崎さんはそれに気づいてないのか、さらにあたしの神経を逆なでするようなことを言う。

「君が送っていく？彼女を？……逆じゃなくて？」

……今、なんて言った？

「どういう意味、ですか……？」

かあって、頭に血がのぼる。

押さえた声が、いつもより低くなってるのは、わかった。

「……どういうって、そのままの意味だけど。どう見たって、彼女が君を送る方がしっくりくるじゃないか」

「!」

……暁が、男らしく見えるから？あたしの方が、女らしく見えるから？

あたしが暁を送るのは、おかしいって、そう言うの!？

「……………」

……何にも、知らないくせにっ!!

暁のことも、あたしのことも、何にも知らないくせにっ!!

あたしの中で、何かが弾ける音が聞こえた気がした。

「大体、暁、暁って、麻由さんの話には彼女がよく出てくるよね。まるで恋人みたいに……。一体、彼女は君の何なんだ？」

「……………」

「麻由さん？聞いてる？」

「……………にしてよ」

「え？」

「いい加減にしろっつったのよっ!」

本当は殴りつけてやりたかったけど、震えるこぶしを握り締めて、城ヶ崎さんをきつく睨みつけた。

「麻由、さん……」

ちょうど信号待ちで車が止まって、驚き顔の城ヶ崎さんが、あたしを見つめ返す。

……限界、だった。

ずっと我慢してた。城ヶ崎さんは仕事で疲れてるんだとか、それほどあたしのことを大事に思ってくれてるんだとか、一生懸命理由を考えて、自分の気持ちをごまかして。

“ かつちゃん ” を受け入れてくれたこと、うれしかった。あたしも、城ヶ崎さんを受け入れたかった。

……でも、もう限界！

「……人がおとなしく言うこと聞いてりや、調子に乗ってんじやないわよ！他の男だけじゃなく、暁とまで口聞くなって言うつもり！？」

「あ……」

「暁があたしの何か？じゃあ、聞くけど、あたしはあんたの何なわけ？言っとくけど、あたし、あんたみたく独占欲の強い自己チュー男はお断りだから。付き合うなんて言った覚えもないのに、恋人面しないですよ！しかも、暁のこと何にも知らないくせに、バカにして！暁はあたしにとって、あんたみたいにクソつままない男よりも、何倍も何千倍も大事な人なのよ！あんたと暁なんて天秤にかける必要もないくらい、暁の方が重いの！わかる！？」

「あの……」

「悪いけど!」

何か言いかける城ヶ崎さんへビシッと指を突き出して、何も言えないようにさらにきつく睨む。

「あたしはあんたのお人形にはなれないから。そういう相手が欲しいなら、他をあたって。あたしはもう、うんざり。今までおっきな猫かぶって、かわいい女やってあげてたし、これからそのつもりだったけど、もう限界。こっちが本当のあたしだから……」

かわいいのは、外見だけ。気も強いし、口も悪い。

それが、本当のあたしだから……。

「あんたの好きになったあたしは、作り物なの。騙されてたとも知らないで、全部好きだなんて、ほんと笑っちゃうわ。……どう? 幻滅した?」

フツて、おかしくもないのに笑ってしまう。

ふざけんかって、こんな女、冗談じゃないって、思ってるでしょ?

「……でも、幻滅したのはお互い様なもの。あたしも、城ヶ崎さんがこんな器のちっちゃいつまんない男だなんて思ってたなかったんだから。これでおあいこよね?」

最後にニツコリと、できるだけ今まで見せてたのと同じ笑みを浮

かべて、助手席のドアを開けた。

「え！？ちょっ……！」

城ヶ崎さんが掴もうとした手を払いのけて、外に出る。

「はぁ、スッキリした！じゃ、もう二度と会いたくないし、会うこともないと思うけど、せいぜい元気だね。……バイバイ！」

「麻由さ……！」

城ヶ崎さんが何か言う前に、勢いよくドアを閉めた。

ちょうど信号が青に変わって、後ろの車がクラクションを鳴らす。

狭い道だし、車を置いて追いかけるなんて無理だろうから、後ろでなんか叫んでるのが聞こえたけど、あたしはそれを無視して、彼の車から急いで遠ざかった。

クラクションがひどくなって、そのうち、城ヶ崎さんの車が走り出した気配を感じて。

……一瞬、振り向きかけた体を、無理やり堪えた。

自分でしたことなのに、叫びだしたくなるほど苦しくて、握り締めた手の震えが、止まらなかった。

初めてやけ酒なんてものをしたのは、中学生の時だった。

あの、初めてつきあった男に振られた日。

その頃、大人は失恋したらやけ酒するもんだって思ってたから（必ずしもそうじゃないってことを知らなかったし）、それならあたしもって、近所にある、人気のない場所へ隠れて、一升瓶抱えて泣き喚いた。

気づいた時には、ベッドの中で。

お母さんの話によれば、偶然通りかかった人が、ベロベロに酔っ払ってたあたしを見つけて、運んでくれたらしかった。

もちろん、さんざん両親には怒られたけど、その時のやけ酒が、気持ち結構楽にさせてくれたもんだから、あたしの中では、それ以来、失恋するとやけ酒っていうのが定着しちゃったんだけど。

……ぜんっぜん、効かない。

どれだけお酒を飲んでも、効かない。

あの日から一週間が過ぎて、教育実習も終わった。

またいつもと変わらない毎日が始まれば、城ヶ崎さんのことだっ
て忘れられる、次の新しい恋を探せばいい、そう、思ってたのに…

…。

どれだけお酒を飲んでも、どれだけ酔っ払っても、ちっとも楽にならない。

忘れられない。

……涙が、出てこない。

仕事を終えて、ここのところよく行く、近所の酒屋に足を運ぶ。

「いらっやいませ〜。あ、こんちわ」

すっかり顔なじみになっちゃった店員くんが、あたしを見て、笑みを浮かべる。

あたしもそれに笑顔で応えてから、ビールを何本かとチューハイ数本、そこまで大きくない焼酎を一本、迷わずに手にとった。

「毎日、大変ですね〜」

まさかこれを全部あたしが飲んでるなんて思いもしないんだろう
彼が、レジを打ちながらそう言う。

たぶん、家族が飲む分をあたしが買いに来てるとかって思ってる
んだろうなあ。

……これくらいじゃ、ほんとは足りないんだけど。

そう言ってみたい衝動を堪えて精算を済ませたあたしに、『氣をつけて』とお酒を渡してくれた彼に、

「ありがとう」

って、ニッコリとお礼を言えば、彼の顔が赤くなった。

……前は、男の人のこういう反応見るの、嫌いじゃなかったのにな。

また沈み込みそうになる気持ちを、軽く頭を振って追い出した。

あの時から何度か、城ヶ崎さんから電話とメールがあつた。

もう、傷つきたくなくて……傷つけたく、なくて。ずっと無視してた。

10日目。

連絡がこなくなつて。

あたしは、お酒の量が増えた。

でも……まだ、泣けない。

「「ストーカー!？」」

城ヶ崎さんと別れて2週間が過ぎた今日。あたしは、暁のマンションへ遊びに来てた。

暁と、晴れて彼女の恋人になった元宮ゆっきーと向かい合って、2人合作の料理を頂きながら、つい口にしてしまった言葉に、2人は揃って目を丸くした。

……いい感じにハモってくれちゃって。一緒に暮らしているとやっぱり似てくるのかしらねえ？

「うーん、ほんとにそうなのか、まだ、わかんないんだけど。なんか最近視線を感じるような気がして……」

持参した焼酎を味わいながら、最近時々感じる不快な視線を思い出す。

視線を感じた時にその方向をうかがうんだけど、誰もいなくて……。気のせいかもしれないけど、それにしても回数が多すぎると思う。

……正直、気持ち悪い。かなり。

「いつからだ？」

「一週間くらい前、かな」

「そんなに前から？なんでもっと早く言わないんだ！」

暁が心配そうに表情を曇らせて怒っているのに、思わず口元を緩めてしまう。

心配をかけたくなかったから言わなかった。

でも、心配してもらえとうれしかったり……。

「ごめん。でも、視線を感じるだけだし……。ほら、前にもこんなこと、あったじゃない？」

「ん？……ああ、あれか」

あたしの言葉に暁が思い出したらしくて、うなづく。

「何？あれって？」

一人事情がわからないゆっきーが首を傾げた。

「前にもね、こんなことがあったのよ。視線を感じて、ストーカーかなって気にしてたんだけど……」

「麻由に告白しようと思ったけれど、勇気が出なくてオロオロしていた他校の高校生だったんだ」

思い出してクスクスと笑ったあたしの後を、暁が続けた。

あの時は、暁と一緒に罠にかけて捕まえた。でも、捕まえてみたら、真っ赤になって手紙を渡すもんだから、拍子抜けしたっけ……。

その話を聞いたゆっきーが、顔をしかめる。

「あつぶないなあ、2人とも……。もしそいつが本物のストーカーで、凶器とか持ってたらどうするつもりだったの？」

まあ、確かに。それも、考えなくはなかったけど……。

一応、すぐに逃げられるような場所を選んだし、催涙スプレーとかも持っていてたし。

「何かあってからじゃ遅いんだからね？ もうそんなことしたらダメだよ？」

「うう、はい……。ごめんなさい」

ゆっきーに叱られた暁が、素直に謝る。

年上と年下が逆転したような2人の様子を見ると、上手くいつてるんだなって思って、嬉しい反面、ちょっとうらめし……。いやいや、うらやましい。

「今回だって、どんな奴かわからないんだから、十分に気をつけないと……。って、ちよつと麻由さん、聞いてる？」

「……はあい」

麻由さん。

すっかり仲良くなって、あたしの性格も大分把握してきたゆっきーは、あたしのことをそう呼ぶ。

他に呼びようがないんだから仕方ないけど、そう呼ばれる度に、同じ呼び方をしてた人を思い出して、胸が小さく痛んだりする自分が、すごく嫌だったりする。

「警察には行ったのか？」

「ううん。視線を感じるってだけじゃ、何もしてくれないと思うし」

暁の問いに、焼酎をゴクツと飲み干して、肩をすくめて答えた。

「そうか……。でも、心当たりとかないのか？ほら、前に振った男達の誰かとか」

「そんなの……」

……心当たりがありすぎて、まったく絞りようがないかも？

「でも、俺が暁さんにそうだったように、麻由さんが気づかないうちに好きになられてる場合だってあるわけだし……。確かに、麻由さんが振った男っていうのは一番犯人の可能性が強いと思うけど、一概には言えないんじゃないかな？」

ああ、そう言えば、ゆっきーは暁を電車で一目ぼれしたとか何とか。

暁に会いたくて、うちの学校に教育実習に来たって言うんだから、なかなか一途な男よねえ、こいつも。

そんなことを思って、他人事を真剣に悩んでくれちゃってる二人

にニヤニヤとこっそり笑みを浮かべていたら、二人が顔を見合わせて、あたしを見てから同時にため息をついた。

「?」

「そうだな……。麻由の場合、あちこちで引っかけて歩いているから、余計にわからないし……」

「そうそう。この前の実習生達だって見事に引っかかったもんね……」

……………。

……………。

「えー、あきちゃんもゆっきーも人聞き悪い。あたし、誰も引っかけてないしい」

ニコツて笑ったあたしに、暁とゆっきーが『やれやれ』と肩をすくめやる。

……わかってるわよう。ストーカー野郎に付け狙われるのは、たぶん、あたしがかぶってる大きな猫ちゃんのせいです。

でも、逆に言えば、ストーカーがあたしの本性を知らないなら、それを知れば逃げてくんじやないかなあーって、思うけど……。

「犯人特定するのは難しいよね、やっぱり……。あ、でも、視線を感じるようになったのって、一週間ぐらい前って言ったよね?じゃあさ、そのちょっと前くらいに知り合った男の人とか、逆に振っち

やった男の人とかいないの？ずっと前に振られた人がストーカーするっていうのも考えにくいだろうし。少しは絞れないかな？」

「……………」

ね？ってゆっきーに同意を求められたけど、あたしは咄嗟にうなずけなかった。

……だって、城ヶ崎さんが一番に浮かぶから。

正直、あたしだって考えなかったわけじゃない。もしかしたらって……。

でも、そんなバカな考えはすぐに捨てた。

あの人、そんなに暇じゃないもの。

「ちょうどその頃教育実習も終わっただろう？タイミング的に絞るのは難しいんじゃないか？」

うなずかなかったあたしに何か気づいたみたいで、暁が代わりに答えてくれた。

「それよりも……」

「あ！これ、おいしい」

暁が作ったロールキャベツを頬張って叫んだあたしを指差して、彼女がため息をつく。

「幸紀君。こいつの、危機感のなさの方が問題だ」

「確かに」

人の顔見てうなずきあうカップルに、頬を膨らませて抗議する。

「何よお。おいしいものはおいしい顔で食べなさいっていうのが、うちのお母さんの口癖なんだもん」

ある意味、我が家の家訓よ？

「それは、いいことだけれど……。ああ、そういえば。麻由、お前のご両親が旅行に出るのっていつからだった？」

暁が苦笑して、あたしの話で止まった箸を再び動かしながら聞く。

うちの両親がちょうど結婚30年で、その記念にあたしと、もう結婚して家を出てるお姉ちゃんとで旅行をプレゼントすることになったって、この前暁に話してあった。

「今日、出たけど？」

朝も早くにウキウキと出かけていった両親を見送りましたとも。

いつまで経ってもバカップルなあの人たちは、腕組んでイチャイチャと出かけていったわよ。

それが何か？って感じで聞き返したら、暁とゆっきーが目丸くする。

「き、今日！？麻由、お前なあ……」

「じゃあ、麻由さんは今夜から一人ってこと！？それは、危なすぎるんじゃない？」

「大丈夫、大丈夫。ここからの帰りもタクシー使うし、ちゃんと戸締りもするし……」

そりゃあね、あたしだってちょっと心細いなあって、そう思ったのよ？だから今日だってここにお邪魔したっていうのもあるし。

でも、変に心配かけたくなかったし、極力一人で外に出ないようにすれば大丈夫だろうって、そう思ってたんだけど……。

どうやら心配性の暁は、そう思ってくれないみたいで……。

「麻由、いつご両親は帰ってくるんだ？」

「4日後」

「じゃあ、それまでここに泊まれ」

……は？

すごく当たり前っぽく言う暁に、さすがのあたしも箸が止まった。

「……………やゝ、いいよお、大丈夫だって！」

っていうか、悪いじゃない？恋人なりたてのラブラブカップルの

邪魔したら。

ゆっきーは自分の住んでたアパートが火事になったとかで、実習の途中からここへ転がり込んだ。でも、晴れて恋人になれたのは実習が終わってからで、つまりは同居が同棲に変わってから、まだ一週間しか経っていないってことで……。

そりゃ気持ちはうれしいし、心強いけどさ、いっちばくんイチヤイチヤしたい時なんじゃないの？誰かさんは……。

そう思って、意味深にチラッとゆっきーに視線を移せば、彼は、

「気にしなくていいよ。……遠慮しないから」
って、ニツコリと笑った。

……………。

……………。

……………あ、そう。しないの、遠慮。

「ほら、幸紀君もこう言っているし、何も気にしなくていいぞ？」

「……………」

ゆっきーの言った意味を、絶対に誤解してる暁の無垢な笑顔と、その暁を見て満足そうなゆっきーの邪悪な笑顔に、あたしは。

……………うなずくしかありませんでした。

月曜日に提出するレポートを仕上げてしまおうからって、ゆっきーが部屋に引っ込んだ後、暁と2人で、リビングのソファに並んで、お酒を飲んでいた。……っていつても、あたしが焼酎を2杯空ける間に、暁はワインをグラス半分減らす程度だけど。

「こうして飲むのも、久しぶりだな」

「そうだねー。……だってえ、あきちんってば、ゆっきーばかりで全然あたしに構ってくれないんだもん」

そう言って拗ねて見せたら、まだ酔ってない暁が、『阿呆』って笑う。

その照れた顔が、前より一段と彼女をきれいに見せていて、女のあたしでさえドキッとさせられる。

それもこれも、ゆっきーのおかげ？

「うまくいってるみたいだね」

あんなこと言ったくせに、たぶん気を使ってくれたんだろう彼の、部屋をちらっと見て暁に言えば、暁がほんのりと顔を赤くして、コクツとうなずく。

「……うん。麻由のおかげだ。ありがとう」

あらまあ、こんなかわいい顔、どこででもされたんじゃない、ゆっき

ーも苦勞しそうね……。

「なあに？ あたし、何かしたっけ？ ……あ。もしかして、酔っ払った暁をゆっきーに預けたこと？」

そう意地悪く聞けば、暁の顔が今度は真っ赤になる。

酔っ払った暁の悪癖。それは、人恋しくなって、自分の気に入った相手を無意識に誘っちゃうこと。

これがまた、とんでもなくかわいくて、色っぽいなのって！

暁の中では、ただ誰かに一緒に寝て欲しいだけらしくて、あたしも誘われちゃったことあったんだけど、あたしが男だったら、間違いなく寝るだけじゃすまなかったと思う。

それわかってて、あの日、あたしはゆっきーに暁を預けたわけだけど……。

「ちがっ……。や、あ、あれも……感謝するべき？ なの、か……？」

案の定、ゆっきーを誘っちゃって、しっかり頂かれちゃった本人が、『いや、だけど……』とかブツブツ言いながら、顔を赤くしたまま首を傾げてる。

まあ、あれがいいきつかけになったのは、確かみたいだし？

「私が言いたかったのは、いっぱい背中を押してもらったからということで……！」

「わかってるってば。もう、暁って、いちいち反応がおもしろすぎ」
暁のうろたえ方が楽しくて、クスクスと笑いが止まらない。

「むう……」

からかわれたと気づいてうなる暁にさらに笑ってから、グラスに新しい焼酎の水割りを作る。

「……でも、本当によかったね。あたし、暁には幸せになって欲しいって思ってるから。暁が幸せそうでうれしいんだ」

自分のグラスを暁のに軽く当てれば、チンッて軽い音がした。

暁がふわって柔らかく笑う。

「ありがとう……。あ、でも、私だって麻由には幸せになって欲しいって思っているんだぞ？私が幸紀君と出会えたように、麻由にもきっと、絶対、そういう人がいる！」

そう力説した暁に苦笑する。

暁が幸せになるのは当たり前。あたしは、暁みたいにかわいくないからなあ……。

自分を否定されるようなことがあっても、ただまっすぐでいた暁と、偽物を作り出して自分を隠してるあたし。

あたしたちは似てるけど、そこが違うから……。

「だいいけどね。……あゝあ、どっかにいい男、落ちてないかなあゝ」

そんな馬鹿みたいなことを言って、甘えるように暁の肩にもたれかかる。

暁は暖かくて、いい匂いがする。すごく落ち着く……。

「……なあ、麻由？」

暁のためらいがちな声が、体に響いてくすぐったい。

「んゝ？」

「ずっと気になっていたんだけれど……」

「なによ？」

「もしかして………城ヶ崎さんのこと、忘れられないのか？」

「！」

暁の口から出たその名前に、無意識に体がピクツて反応した。

「……や、やだなあゝ、そんなわけじゃない。すっかりさっぱり忘れ去ったわよ、あんな男」

慌ててごまかしたけど、自分でも情けないくらいその声はあたしの意思を裏切って……。

「嘘つき」

「……………」

暁の声を無視して、ゴクツと水割りを喉に流し込んだら、小さなため息が聞こえてくる。

「あの日以来、男の人からの誘いも全部断っているんだろう？ 酒の量だって最近増えているんじゃないのか？」

「ちよっ……………」

持っていたグラスを暁に取り上げられて、抗議するように見上げたら、そこにあたしのことを心から心配してる顔があつて。

「麻由？」

なんか、暁のそんな顔を見ていたら、体の力が、ストンって抜けて……。

「……………うん」

うなずいて、暁の肩に、またもたれかかったら、彼女が盛大にため息をついた。

「やっぱり……。ああ、もう、お前は、まったく……。城ヶ崎さんから、連絡は？ 来てないのか？」

「……この前まであったけど、全部無視してたら、こなくなった」

「意地っ張り」

暁が呆れたように言う。

わかってるよ、そんなこと。

「……だって、あんまりイライラすることばかり言うから、自分を隠せなくなっちゃって、被ってた猫も剥がしちゃったし、ひどいことも、たくさん言っちゃったんだもん。あんな城ヶ崎さんはもう見たくないし、あっちだって、きっと、あたしの顔なんて見たくない……」

彼が好きだったのは、作り物のあたし。

本当のあたしを見て、きっと、騙されたって思ってるから……。

「あの後ね、電話があった時は、正直驚いたの。もしかしたら、まだ……って、ちょっと期待した。でも同時に、騙してたこと怒って、罵声はせいを浴びせられたらどうしようって、怖くて……。別れる前のことを考えたら、そっちの方が可能性が高かったし。そうなら、あたし、またひどいこと言っちゃいそうで……。これ以上、嫌いになりたくなくて……。嫌いになって欲しくなくて……。メールも、内容読まずに全部削除しちゃった」

自分でそうしておいて、連絡が来なくなったら気持ち荒れるなんて、あたしは相当バカだと思う。

でも、どうしたらいいのかなんて、わからなかった。

電話に出ても、出なくても、あたしたちの関係が元に戻ることは、もう二度とないから……。

「麻由……」

もたれかけてた頭を、暁が優しく撫でてくれる。

「……あたしがね、振ったのよ？ 独占欲強い自己チュー男なんてお断りだ、って」

「うん」

「本当にね、そう思ったし、今でもそれが正しかったって思うの」

もう一度同じ状況になっても、まったく同じことをする自信がある。

「うん」

「なのに……」

「うん」

「なのに、ね……」

すごく、苦しい。

あの人に、会いたくて……。

「うん。わかっているから……。麻由は、城ヶ崎さんが好きだった

んだよな？ 本当の…本当に…好きだったんだろう…っ？」

そう言った暁が、グスグスッと鼻をすすする。

もたれかけた頭を上げて、隣を見れば、ボロボロと遠慮なく涙を流す彼女がいて…。

「もうっ…！ なんで、暁が泣くのように…」

「だ、だって…麻由、泣きそ…で…」

気がついたら、あれだけ出てくれなかった涙が、あたしの目からも溢れだしてた。

「だからって、暁がっ…泣くこと、ないでしょ…っ？」

「うん…だけど…」

「あ、暁が、泣くからっ…！ つられちゃった…じゃない…っ」

「ん、ごめん…」

暁のせいにして泣き出したあたしに、彼女が泣き笑いの顔で謝る。

そのぐしゃぐしゃの顔が、優しくて。

「うう…あきらあ…っ…」

「うん…」

全部わかって、一緒に泣いてくれる暁の肩を借りて。

気が済むまで、泣いた。

……好きだった。

あたしを見る時に優しく細められる目が、『麻由さん』って呼ぶ時の心地いい低音が、スーツからかすかに香る煙草の匂いが……。

彼を形作る全てのものが愛しくて。

いつの間にか、こんなにも好きになってた。

あんなに腹が立ったことよりも、今は優しかった彼しか思い浮かばない。

二度と会いたくないって、二度と会うこともないって、そう言ったのはあたし。

だけど。

「会いたいな……」

叶わない願いを、小さくつぶやいた。

明日には両親が帰ってくるという日の夕方。

暁は国語科の会議があつて遅くなるというので、あたしは『ぐれも気をつけろ』っていう彼女の心配する声に苦笑気味にうなずいてから、明るくて人気のある道を選んで、先に暁の家まで帰った。

おかげさまで暁の家に泊めてもらつてから、ストーカー野郎は現れてない。あれ以来、視線も感じることはないし、誰かにつけられたりもしていないようで、とりあえずホッと安心していた。

……でも、その安心がまずかつたんだ。

暁は遅くなりそうだし、ゆっきーも今日は大学の用事であまり早く帰れないって言つてたから、3日間泊めて貰つたお礼に、今日はあたしが夕飯を作るって言つてあつた。

あの晩、しっかり泣かせてもらったおかげで、少し気持ちも軽くなったし、城ヶ崎さんのことも、時間が経てば忘れられそうな気がしてきたし……。

色々な感謝を込めてつていうのもあつて。

暁には敵わないけど、あたしだって少しは料理くらいできる。

……まあ、それも外面用にがんばったからだけど。

「あらら、アルコールが少ない」

大体の料理を作り終えて、気づいた。

ビールもワインも、あたしの焼酎も、底をつきかけてる。

……原因は、あたし。

「かなり飲んだもんなあ……」

自分の持ってきた分だけじゃなく、2人用に置いてあったもので、お言葉に甘えておいしく頂いちゃった自分に、さすがに反省。

うーん……。少し暗くなりかけてるけど、すぐそこにコンビニあったし。

歩いて3分のコンビニまで行くのに、危ないこともないでしょうって、財布だけ持って出かけた。

「おも……」

コンビニで買いこんだ大量のアルコールを一度下ろして、暁に教えてもらった暗証番号を打ってから、開いたドアをまたアルコール抱えて入った。

無事に帰ってこられたことに、やっぱり、ちょっぴり安心する。

エレベーターの前に携帯電話で話をしている男の人がいて、彼がボタンを押して開いたエレベーターに、同乗させてもらうことにした。

先にエレベーターに乗り込んだ男の人に軽く会釈して、扉側に立って5の数字を押す。

すぐにエレベーターが止まって、最上階に用のあるらしい男の人を残して、開いた扉から降りた。

「よいしょっと……」

預かった鍵を開けて、玄関で荷物を下ろす。

重い荷物からの解放感と無事に帰ってこられた安心感で、ふうって息を吐いてから、扉を閉めようと振り向いた。

……その時、だった。

「!?!」

あたしが伸ばした手がノブを掴もうとした瞬間、その扉が逆に開いて、すごい勢いで男が体を滑り込ませてきた。

さっきの……!

エレベーターと一緒に乗っていた男。

まさか……ストーカー!?!?

「だっ、誰っ!？」

ものすごく嫌な感じに、靴のままズリズリと後ずさって、男の顔がもっとはっきり見えるよう、手探りで灯りをつける。

靴で蹴ってしまったコンビニ袋からビールの缶が転がり出て、閉まろうとしていた扉に挟まって、プシュッと音を立てた。

「……やだなあ、麻由。俺がわからないの？」

あたしが後ろへ逃げる分、ゆっくりと近づいてくる男の顔に浮かんだ、人懐っこい笑みを見た時、やっと男の正体に気づいた。

「さ、酒屋の……」

最近顔なじみになってた、あの、酒屋の店員くんだった。

うっそでしょ!?!?こいつが、ストーカー……!?!?

ああっ、でも、あの酒屋に通うようになったのは10日前くらいからだし、確かにこいつなら、納得……って、んなこと考えてる場合じゃない!

「な、なんでここに……?」

「最近麻由が会いに来てくれないから……。家にも帰ってないみたいだったし。どこに行ったのかと思って、心配したんだよ?」

……それでわざわざ探してくれたって?

き、気持ちわるっ！やだっ！

背筋がゾッととして、体が小刻みに震えた。

あきらあゝ！ゆっきいゝ！帰ってきてえっ……！

ずっと後ずさりしていたら、とうとう壁に辿りついて、逃げ場がなくなってしまう。

ストーカー男が、目の前に立った。

そのまったく悪びれる様子のない、一見さわやかな笑顔に見下ろされて、逆に気持ち悪さと恐怖が体中を駆け巡る。

「麻由、会いたかつ……」

「触るなっ!!」

伸びてきた手を、パシッと払って睨んだら、ストーカーが呆然とした顔であたしを見つめる。すごく、不思議そうに。

きっと、抵抗するなんて思ってたんだ。

……あいにく、あたしはそんなにか弱くないの！

「麻由……？」

「ど、どうやって調べたんだか知らないけど、気安げにあたしの名前を呼ばないで。あたしはあんたなんか知らない」

できるだけ冷静に、震える声を抑えて言う。

こいつはあたしの本性を知らない。なら、幻滅させれば、あきらめてくれるかもしれない……。

「……何言ってるの？いつも店で俺だけに笑いかけてくれたじゃないか？麻由は何も言わなかったけど、俺にはわかったよ。いつもあなただけを見てたから。麻由も俺を好きなんだって……」

……ありえないっ！なんで愛想笑いしただけで、そんなこと思われなきゃなんないの！？

「冗談じゃない！あんただけに笑いかけたことなんてないし！勝手に変な妄想してんじゃないわよ、変態！あたしはあんたなんか、好きじゃない！」

壁に追い詰められて、それでもなんとか逃げる方法がないか頭の中で考える。

携帯はカバンの中で、ここからは届かないし、何かで音をたてようと思っても、ちょうどいい道具がみあたらない……。

やっぱり、隙を見て玄関へ逃げるしか……。

「嘘だよ……。麻由はいつもかわいい笑顔を向けてくれて……。俺のことを好きで……。俺に追いかけてきて欲しがってた……」

んなこと、言ってもなければ思ってもないってば！！

妄想癖ストーカー男の激しい思い込みに、背筋をまた冷たいものが上がっていく。

しっかりしろ、あたし！

こんな奴、怖くない、怖くないんだから……っ！

「麻由は……俺の麻由は……」

「あんたのじゃないって言ってんでしょ！いいっ加減にしろっ！！」

ぶつぶつとつぶやく男の体を、精一杯の力で押す。

突然の衝撃に相手がよろけた隙に、一気に玄関へ……。

「きゃあっ！？……痛っ！」

思った以上にすばやい動きの男に、逃げ切る前に後ろから腕を掴まれて、引っ張られた勢いで床に転がされてしまう。

ダイニングテーブルの足にぶつかって、乗っていた皿や料理がいくつか床に落ちて派手な音をたてた。

「ゲホッ……コホッ……」

頭と背中を打って、その痛みに咳き込んで、顔をしかめた瞬間、男が馬乗りになってあたしの体を押さえつける。

……最悪！

「ああ……ごめんよ、麻由。痛かった？でも、なんで逃げようとするの？」

ストーカー男がそう言って、頭を撫でようとするのを、必死で身をよじって逃げる。

でも、どれだけあたしがジタバタと抵抗しても、まったく敵の体は動かない。

今更ながらに、自分の非力さを思い知らされて、この後に待ち受けるものにゾツとする。

じ、冗談じゃないっ！誰がこんな奴にっ……！！

「あんなひどいこと言って。照れてるだけだよ？麻由……」

「離してっ！……離せつつってんでしょ！！」

「麻由にそんな言葉は似合わないよ。か弱くて、かわいい、俺の麻由……。俺が守ってあげるからね」

必死でもがくあたしの両腕を簡単に片手で押さえ込んでそう言った男を、下から精一杯きつく睨み上げるしかできなくて、悔しい。

「あたしはっ……！か弱くもなければ、かわいくもない！あんなにんかに守ってもらわない必要もない！勝手に妄想して、人の人格否定するなっ！」

どいつもこいつも馬鹿にして！！

そりゃあ、おっきな猫被って生きてきたわよ！たくさん自分を偽って、たくさん男を騙してきたわよ！

……でもっ！

そうしなきゃ、壊れそうだったの！

好きだった男に『思ってたのと違う』って、『かわいくない』って、言われる気持ちがある！？あたしって何？って、そう思う気持ち、わかんないでしょっ！？

「……離せっ！！変態っ！！」

「麻由は、そんな言葉言ったらダメって……言っただろ？」

「！！」

ストーカー男がポケットから取り出したものに、サアツと血の気が引いていく。

その細身の折り畳みナイフの、冷たい切っ先を首筋に当てられた感触に、体が固まった。

「なっ……」

なんでそんなもの、持ってるわけ……！？

「言うことを聞けない子には、おしおきしないとね……」

じ、冗談じゃない……っ！

「麻由……。俺の麻由……」

「やっ……」

ストーカー男のナイフを持った手が、首筋を這う感触に耐えられなくて、軽く顔を動かしたら、首に痛みが走った。

「いっ……!」

……やだ。やだ、やだ、やだっ!!

なんで!?

なんで、こんな目にあわなくちゃならないの!?

だれかつ!!

助けてっ!!!!

「ああ……」

男が、どこか恍惚とした表情を浮かべて、ナイフについた血を見つめる。

その異常さが、気持ち悪くて……。

「ひっ……い、いやああっ!!」

あたしが、あまりの恐怖に叫んだ時。

バンっていうすごい音が聞こえてきて、驚いたように顔を上げたストーリーカー男が、次の瞬間に、あたしの上からいなくなった。

「う…っ…」

何が起こったのかわからなくて、とりあえず急いで体を起こしたら、ストーリーカー男が転がってうめいていて……。

「……え？」

あたしの目の前にしゃがみ込んだ人を見つめたけど、その人が誰かを理解するのには、数秒の時間が必要だった。

……だって、あまりにありえないから。

「麻由さん！」

「……じょう…が…さきさん？」

城ヶ崎さん……？

間違いなく、この目の前で息を荒げている人は、城ヶ崎さんだ。

でも、だけど。

なんで、ここに、城ヶ崎さんが……？

「なん………あ、あぶないっ！」

つい、状況を忘れて問いかけてしまいそうになった時、彼の後ろにいたストーカーがゆっくりと立ち上がってナイフを構えるのが見えた。

「なんだよお……！俺の麻由に近づくな……っ！」

「きゃあ！！」

ストーカーが、すばやい動きで城ヶ崎さんへナイフを突き出す。

その刃先が、よけ切れなかった城ヶ崎さんの腕を掠めて、彼が微かに呻いた。

「城ヶ崎さんっ……！！」

城ヶ崎さんがっ……！！

「いいからっ！麻由さんは、早く……！！」

あたしを逃がそうと、かばうように腕を広げる彼の傷口から流れ出る真っ赤な血に、ゾツとする。

やだ！いやだっ！！

ストーカーが、再びナイフを構えて向かってくるのが見える。

「やめてえっ……！！」

だめっ！！

やだっ！もう傷つけないで……っ！！

城ヶ崎さんを守るため、立ち上がろうとした、その時。

「麻由さんっ！！」「麻由っ……！！！」

あたしの名前を呼ぶ声と同時に、ゆっきーと暁が駆け込んできて、状況を見たゆっきーが、すばやくストーカーへ、持っていたカバンを投げつけると、ストーカーが一瞬ひるんで……。

……あとは、早かった。

城ヶ崎さんがストーカーの腕を掴んでナイフを外して、ゆっきーが勢いよく殴りつけたら、相手は驚くほどあっけなく気を失った。

暁が警察と救急車を急いで呼んで、泣きながら、あたしの首にタオルを当ててくれて。

ゆっきーがストーカー男を縛って。

城ヶ崎さんも、暁に腕をしばって止血してもらって……。

「麻由さん……」

ずっと腰が抜けたように動けないでいたあたしの前に、城ヶ崎さんが、心配そうな表情を浮かべてしゃがみこむ。

「城ヶ崎、さん……」

その、前と変わらない優しい顔を見たら、ずっと堪えていたものが涙になってあふれ出して……。

「ふっ……うう……こわ……こわ、かった……。こわかつ……」

「うん。もう、大丈夫だから。もう大丈夫だからね……」

どうしようもなく震えてしまう体へ、おそろおそろ伸ばされた手を、力いっぱい握り締めた。

城ヶ崎さんと一緒に、生まれて初めて救急車に乗って病院へ運ばれた。

あたしの怪我は大したことなくて、打撲少々と首の切り傷だけ。その首の傷も、もう血も止まりかけてたし、消毒されて包帯されて終了、だったけど、城ヶ崎さんはそうはいかなくて、何針か縫うことになるみたいだった。

診察が終わった後、刑事さんに軽く事情聴取を受けた。詳しくはまた明日警察に行くってことになって、刑事さんは帰って行った。

城ヶ崎さんを待つ間、ずっと付き添ってくれていた暁が、今日彼があそこにした理由を話してくれる。

「この前、麻由の話を聞いて、おかしいなと思ったんだ。一度しか会ったことのない私が言うのも変だけど、あの人がそんなに自己中心的なことをするとも思えなかったから……。だから、麻由には叱られるの覚悟で、城ヶ崎さんに連絡を取った。ごめん」

……お人好しなんだから。

あたしのために泣いて目を赤くした暁が、いたずらを見つけた子供みたいに謝るのを見れば、怒る気も失せてしまう。

軽く首を横に振ったら、暁がホッとした顔をする。

「それで、城ヶ崎さんから話を聞いたんだ。……まあ、詳しいことは本人から聞いた方がいいと思うから言わないけれど。ただ、ずっと、麻由に避けられて途方に暮れていたらしいぞ？電話には出ないしメールも返ってこないしで。麻由の家にも訪ねていったらしいけど、麻由はその頃からうちにいたしな」

「そう、なの……？」

彼はまだ、あたしに会おうとしてくれていたの……？

「うん。城ヶ崎さんに、どうしても麻由に会わせて欲しいと頼まれた。まあ私も、話を聞いて彼の事情もわかったし、麻由の気持ちも知っているし、二人で一度話した方がいいなと思って。だけど、ストーリーカーのこともあるし、滅多なところでは会わせられないだろう？だから、今日、うちへ来てもらうことにしていたんだ」

「……なんで、言わなかったのよ？」

「言ったら、会ってたか？」

……それは、会わなかったかもしれないけど。

心の中のつぶやきが聞こえたみたいに、暁が人の顔を見て小さく笑った。

そして、改めてあたしの顔を見て、小さくため息をつく。

「幸紀君と偶然電車で一緒になって、麻由を1人しているし、できるだけ急いで家に向っている途中で、城ヶ崎さんから電話があっ

たんだ。切羽詰った声で、暗証番号を聞かれた時には、焦ったぞ。二人で、全速力で走ったんだからな？まったく、あれほど気をつけろと言ったのに……」

「……ごめん。反省してます」

さすがに暁の家で襲われることになるとは思ってなかったとはいえ、一人で出かけなければ、あんなことにはならなかった。

巻き込んで、心配かけて、本当にごめんって、暁に謝れば、彼女が苦笑する。

「とにかく、無事でよかった……」

「うん。……本当にごめんね、暁」

もう一度謝ったら、暁が軽く首を振った。

「そんなに謝らなくていい。一番怖い思いをしたのは、麻由なんだから……。大丈夫か？」

再び心配そうに眉を寄せた彼女を安心させるように、小さく微笑んでみる。

「ん。怪我也大したことないし、ひどいことされる前に助けてもらったし……」

押し掛かれた重みとか、首にナイフを当てられた感触とか……思い出せば、ゾッとして震えそうになるけど……。

「麻由……」

思わず両手を握り合わせたら、その上に暁のきれいな暖かい手が重ねられた。

その暁が、また泣きそうに目を赤くしてるもんだから、つい笑ってしまおう。

「もう、また泣く。そんな顔した暁帰したら、あたしがゆっきーに叱られちゃうじゃない」

それじゃなくても、うかつな真似したこと、後で散々お説教されそうなのに……。

「うう……。だ、だって……」

「……あたしは大丈夫よ、暁。こうやって、あたしのために泣いてくれる友達がいるんだもん。心強いつたらないじゃない？」

そう言って笑ったら、暁の顔が歪んで、泣き笑いの表情になった。

「まゆぅ……」

ああ、あ、美人が台無し……。

「暁ったら、もう……」

「暁さん、麻由さん」

ぐちゃぐちゃ顔の暁に苦笑していたら、そう呼ぶ声が聞こえて。

顔を上げたら、早歩きでこっちへ向かってくるゆっきーが、軽く手を上げた。

「幸紀君！」

暁の顔が、わかりやすいくらいパアツと明るくなる。

でも、その彼女の顔を見たゆっきーが、苦笑した。

「あゝあ、ひどい顔……。また泣いてたの？ 暁さん」

「だ、だって麻由が……」

こらこら！ それじゃ、あたしが泣かせてるみたいじゃないの。

よしよしって感じに、ゆっきーが暁の頭を撫でると、彼女の顔がみるみる赤くなった。

……あゝのねえ。

「ちょっと、ちょっと、ちょっとお。軽くあたしを無視して、イチヤつかないでくれる？」

椅子に座ったまま、ジトッって、恨みがましい目で見上げたら、暁がさらに顔を赤くして、ゆっきーがクスツと笑う。

「ごめん、ごめん」

まったく……。

「それで、どうだった？傷の具合は……」

「あ、うん。おかげさまで、あたしは大したことなかったんだけどね……」

ゆっきーの問いに、そう言って、処置室と書かれた部屋へ視線を動かす。

「そっか……」

城ヶ崎さんがその部屋に入ってから、結構、時間が経ってると思う。

待たされる時間が長くなればなるほど、どんどん不安が募っていく……。

「大丈夫だよ。見た感じ、変な言い方だけど、きれいに切れてたっぽいし。チョイチョイって縫って終りだって」

処置室にチラッと目を向けたゆっきーが、そう言って、あたしを安心させるようにニッコリと笑う。

「うん……」

その笑みに、不安が取り除かれたわけじゃないけど、少しだけホッとしてうなずいた。

年下で、童顔で、女の子みたいにかわいい顔してるくせに、時々妙に落ち着いた大人っぽい顔することがあるんだ、ゆっきーは。

そういう時、なるほど、ちょっとかっこいいかも、とか思わせられるのが、なんかうれしいけど……。

「そういえば、幸紀君は、どうしてここに？」

そう言っ、て、暁が首を傾げる。

そういえば、ゆっきーは、マンションに残って警察の相手や片付けとか、色々と後処理をしてくれていて、ここに来る予定じゃなかったはず……。

「どうしてって……。やっぱり気づいてないし」

「？」

再び首を傾げた暁に、ゆっきーが苦笑交じりにため息をつく。

「暁さん、車のキー持ってきちやってるでしょ」

「キー？」

「うん。城ヶ崎さんの」

ゆっきーがそう言っ、て、椅子に置いたままの暁の鞆を指差す。

城ヶ崎さん、車の止める場所がわからなかったらしくて、迷惑にならない程度の場所に路上駐車してるらしい。それをゆっきーが動かしておくからって、鍵を借りて……っていうやりとりしてたのは、なんとなく覚えてるけど。

「え？だって、鍵はあの時テーブルに……。あれ？」

自分の鞆を覗きこんだ暁が、驚いたように、見覚えのある鍵を取りだした。

「やっぱり。出かける前に鞆をこそこそしてたから、そうじゃないかと思ったんだ」

鍵を受け取ったゆつきーが、苦笑する。

でも、暁が持ってきたやつてたのは、それだけじゃなかったみたいで。

さらに鞆へ手をつ込んだ彼女が取りだしたのは。

……小さなぬいぐるみと、なぜか塩の入った小瓶。

「あ、あれ??」

暁ってば……。

驚いて、そして恥ずかしげに顔を赤くした彼女に、ゆつきーと顔を見合わせて、お互いに噴き出したいのを堪えた。

「……暁さんが持ってきたかったのは、これでしょ？」

押さえ気味にクスクスと笑いながら、ゆつきーが、財布を差し出す。

どうやら、混乱して慌てた暁は、財布を忘れて、目についたものを思わず入れてしまってたらしい。

それだけ慌てさせちゃってたってことは、申し訳ないけど……。

そそっかしいんだから、もう。

「ごめん、幸紀君……」

財布を受け取って、情けなさそうな顔をする暁に、ゆつきーが、クスッと笑って首を横に振った。

その暁を見る優しいまなざしが、城ヶ崎さんと被って……。

また処置室の扉を見つめたけど、まだ出てくる気配は感じられない。

「じゃあ、俺、先帰ってるね」

そう言ったゆつきーの声に振り向くと、腕時計から目を離れた彼が、ジーンズのポケットに、暁から受け取った鍵を突っ込む。

「一応警察の人に、路駐で引っ張って行かないで下さいとは頼んであるけど、早くどこかさなきゃいけないだろうし」

まあ、それはそうだよね……。

「じゃあ、暁も一緒に帰ったら？」

たぶんゆつきーは、暁の車で来てるんだろうから、ついでだし。

部屋の片付けとか、あたしが手伝えなくて悪いけど、ゆっつきー1
人じゃ大変だろうし……。

「え？でも、麻由は……？」

暁があたしを心配そうに見つめる。

「あたしは、大丈夫。もうそんなに待たなくてもいいと思うし。城
ヶ崎さんのこと、送りたいから……」

幸いに、あたしの怪我は大したことないし。

「でも……」

「それに……。ちゃんと、話もしなきゃって」

ごめんなさいも、ありがとうも、それから……。

……少し怖い気持ちはあるけど、あたしのことも。

彼は、会いに来てくれた。あたしのこと、怪我をしてまで守って
くれた。

あたしも、逃げずに向かい合わなきゃ。

「そう、か……」

暁が、まだ心配そうに、それでもあたしの気持ちを汲んで、そう
つぶやく。

「本当に、大丈夫なんだな？」

「うん。ありがと、暁。ゆっきーも」

そう言って、いつものように笑ったら、二人が安心したように微笑んで首を横に振った。

「じゃあ、先に帰るけれど……。後で、うちに戻ってくるんだろう？ 迎えに行こうか？」

「あー、あたしもそのつもりだったんだけどね……。お父さん達が急いで帰るって言ってるし、それまで叔父さんのところにお邪魔することになったちゃって」

旅行の最中に連絡を取ることは控えたかったけど、そういうわけにもいなくて、連絡を入れた結果……。

飛んで帰ってくるというお父さんを『もう大丈夫だから』となだめるのは大変で、結局は、叔父さん夫婦のところへお邪魔することになった。なんとか落ち着いてもらった。

叔父さんに連絡したら、お父さん同様、今にも飛んできそうな勢いだったけど、城ヶ崎さんのことを話して、彼をちゃんと送り届けてから連絡するって言うてある。

「まあ、その方がご両親も安心だろうしね」

ゆっきーの言葉にうなずきながら、小さくため息をつく。

確かにそうだろうけど、あたしとしては、暁たちのところへ泊めてもらいたかったっていうのが本音。

叔父さんところに行ったら、どれだけ過保護にされるか……。

……トイレにまでついてきそう。

「もし何かあれば、連絡してこい。私はいつでも気にしないから。絶対に強がって無理するなよ?」

暁……。

「うん、わかった」

暁の気持ちがうれしくて、ニツコリと笑ってうなずいた。

並んで立ち去る二人を見送ってから、まだ扉の開かない処置室へ目を向けた。

またイスに腰を下ろすと同時に、小さく息を吐きだす。

「遅い、な……」

……大丈夫なのかな？ 一体、何針くらい縫うことになるんだろう？

彼の腕から流れ出す血を思い出して、思わず震えた自分の体を抱きしめた。

すごい量だった、よね……。

ゆつきーは大丈夫って言ってたけど、でも、もし、腕が動かなくなっちゃったりしたら……。

「どうしよう……」

あたし、なんてことしちゃったんだろう……。なんで出かけたりなんか……。

どんどん不安になってきて、自分のしてしまったことに改めて落ち込んで、やっぱり暁にいてもらえばよかったなって、そう思ってた。うつぶいていた時だった。

「もしかして、君が各務麻由さん？」

斜め前から声が降ってきて、ハツとして顔を上げた。

でも、てっきり看護師さんだろうと思ったのに、そこには、髪をベリーショートにした背の高い女の人が、あたしを見下ろしていて……。

「えっと……？　そうです、けど……？」

……誰？

そのいきなり現れた、きれいというか、かっこいいというか、不思議な魅力を発している女の人に、首を傾げる。

言外に誰ですかって尋ねたつもりだったけど、それに対する答えはなくて。

しかも、何を思ったのか、彼女は顔を上げたあたしに近づくと、見下ろした格好のまま、マジマジと見つめ始めた。

「あ、あの……？」

……なに？

「初恋の君、ねえ。……なるほど。確かにこれは、ジョウの馬鹿が紹介したがないわけだ」

初恋の君……？　ジョウ……？

「え！？　あのっ……！？」

なんで顎つかむの？顔、近いんだけど……！このままだと、キスしちゃいそうなんだけどっ！？

え？何？あたし、どうしたらいいんだろう！？

「じゃあ、お大事に」

そんな声が聞こえて、処置室の扉が開いた気配がする。

城ヶ崎さん出てきたっ？

……って、体を起こしたいんだけど、至近距離に迫った美人の顔に、それもできず。

「……ちい！？お前、何やってるんだ！」

城ヶ崎さんのものすごく嫌そうな声が聞こえたと思ったら、キスマであと一歩だった顔が急に遠ざかった。

よ、よかった……。

開けた視界に入ってきたのは、腕をつられた城ヶ崎さんが、動く方の右手でさっきの女の人の、首根っこを掴んでる姿で……。

「よお、ジョウ」

城ヶ崎さんの手が離れて、ニヤツと笑ってかっこよく手を上げた彼女に、彼が大きいため息をつく。

立ちあがったのはいいけど、なんだか城ヶ崎さんに声をかけるタイミングを、完全に逃しちゃったような……。

でも、思ったより元気そうで、ホッとする。

「よお、じゃないだろ。まったく、油断も隙も……。麻由さん、大丈夫だった？」

黒スーツの女の人に盛大なため息をついてから、そう聞いた城ヶ崎さんに、コクツとうなずく。

……ギリギリだったけど。

「で？なんでお前がここにいるんだ？」

「なんでって、お前に何かあれば、私のところに連絡が来るのは当たり前だろうが」

城ヶ崎さんが改めて女の人に問いかけると、彼女が片眉を上げて、そう言う。

「……まあ、それもそうか」

……んん？

城ヶ崎さんの身に何かあれば連絡が行く人って……。家族？でも、城ヶ崎さんの姉妹にしては、全然、まったく、似てないし。

……誰。

思わず、じいっと2人を見つめていたら、女の方がそれに気づいて、プツと噴き出した。

「おい、ジョウ！お前の大事な大事な麻由ちゃんが、なんか盛大な誤解をしそうな勢いだぞ？どうせお前のことだから、私のことをまったく話してなかったんだろ？」

その言葉に、ちょっと恥ずかしくなってうつむいたら、暁以上に男らしい仕草で、また笑われる。

……もう、何よ。しかも、いきなり麻由ちゃんて！

城ヶ崎さんが、困ったように顔を撫でる。

「あー……麻由さん。不本意ながら紹介するよ。彼女は、堂本千寿^{どうもと ちず}うちの……副社長なんだ」

……。

………はい？

確かに、副社長は堂本さんて人で、その名前くらいは聞いたことあったけど……女の人だったの？

「不本意ながら紹介されました、堂本です。改めて初めまして、麻由ちゃん。お噂はかねがね、その馬鹿から聞いてるよ」

噂て、どんな……？

っていうか、不本意だの馬鹿だのて、仲悪いの？

「えっと……各務です」

握手を求めて差し出された手を掴んで、とりあえず自己紹介を返したあたしに、堂本さんがニコツて笑う。

「ああ、それから。変な誤解してるみたいだから、言っておくけど。
男に興味ないから、私」

……あゝ、そおなんですか。

えっと、もしかしてあたし、狙われてたり……？

手、離してもらえないんだけど。

「ちい。いつまで握ってる気だ、お前」

城ヶ崎さんの低音に、ようやく堂本さんの手が離れてくれた。

……ものすごく、しぶしぶだったけど。

「ケチくさいこと言うなよ。こんなに私好みの子をずっと紹介せずにいやがって」

「当たり前だ。そう言うとかっこつけている奴にわざわざ紹介するわけがないだろ」

……あゝ、たとえ紹介されても、堂本さんになびいたりしないと思うんだけどな、あたし。

「かわいくな。人がせっかくお前のために車を用意してやったのに」

「ほお、珍しいこともあるもんだ。お前が送ってくれるのか？」

堂本さんの発言に、城ヶ崎さんがとても意外そうに言う。

でも。

「そんなわけないだろ？」

すぐ当たり前にそんな答えが返ってきた。

城ヶ崎さんが、やっぱりって顔をする。

「どうせ呉羽^{くれは}あたりを呼び出したんだろ？」

「当たり。かわいそうに、呉羽の奴、久しぶりのデートだったんだぞ？」

「……お前、それ知ってて呼びつけたな？」

「さあ？ま、でも、これで彼女に振られたら、いい女紹介してやれよな、お前が」

「なんで僕が。僕は別に頼んでないし。お前が責任とってやれよ」

「嫌だね。あいつに紹介するくらいなら、私がものにする」

……呉羽さんとかいう人、振られること決定？

口を挟むことができないくらいポンポンと軽快に進む会話に、2
人の付き合いの長さを感じさせられた。

でも、堂本さんとやりあってる城ヶ崎さん、なんか新鮮かも……。

「まあ、呉羽のことはどうでもいいや」

どうでもいいんだ……。

「それよりも、私はこれからやらなきゃいけないことがあるし。な
？」

「つと……!」

「きゃっ!？」

ニヤって笑った堂本さんに、突然怪我した腕を掴まれそうになっ
て、城ヶ崎さんが慌ててそれを避けた。

び、びっくりした!

何する気ですかぁ……!

「チッ。避けるのがうまくなりやがって」

「お前のおかげでな」

……一体どんな生活してるのよ。

「ふん。つまんねえの。で、何針縫ったって？」

「……7針」

堂本さんの問いに、城ヶ崎さんが、あたしを気にするように一瞬チラッと見てから、小さく答えた。

7針……。

7針ってどのくらいかわからないけど、結構深く切った人が3針とか言ってたのを聞いたことがあるから、あれよりもっとひどいってことだよね……。

「大丈夫。きれいに切れていたおかげで、完全に元通りになるそうだから」

あたしが何か言う前に、城ヶ崎さんがそう言って、優しく微笑む。

その言葉に、少しホッとして、でも、改めて布でつられた腕を見て、胸の奥がキュウツて痛くなった。

「あの、あたし……」

「7針ねえ。……じゃ、10針くらいにしとくか」

………は？

城ヶ崎さんへ『ごめんなさい』って、謝ろうとした矢先に聞こえてきた、堂本さんの意味のわからない発言に、思わずそっちへ間抜け面をさらしてしまう。

10針にしとく????

首を傾げたら、彼女が城ヶ崎さんの怪我をピシッと指差す。

「『Jōdo社長、ストーカーから恋人守り、名誉の負傷!』つてな。明日の朝刊に載せてもらわなきゃならないからな。7針じゃ、すごいのかすごくないのかいまいちピンと来ないけど、10針ならすげえーって、なんとなく思うだろ?」

……………。

……………。

「お、お前なあ……」

さも当たり前という風にニヤッと笑った堂本さんに、城ヶ崎さんの顔が引きつった。

堂本さんが、その彼の肩をポンツと叩く。

「いやあ、よく守ったな! お前、右利きだから、左腕なら仕事にもさほど支障はないし、怪我の具合もちょうどいい。会社のイメーリアップに大貢献だ。それでこそ、うちの社長!」

……わ。

なんか、いろんな意味ですごい人だ、この堂本さんって。

たぶん、城ヶ崎さんのこと、心配して駆けつけたには違いないん

だろうけど、っていうかそう思いたいけど、転んでもただでは起きないタイプっていうか……。

「というわけだから、麻由ちゃん」

「へ？」

突然名前を呼ばれて、間の抜けた声を出してしまう。

暁よりも背の高い堂本さんが目の前に立って、あたしが少し見上げれば、彼女がニツコリと、魅力的に笑った。

「ジョウの怪我は、仕事に支障をきたすどころか会社に貢献する。会社の連中もカッコイイ社長の姿に士気が上がるだろうし、取り引き先の奴らもこいつにさらに一目置くかもしれない。だから……君は何も気にせずに、こいつに『守られてやった』って胸を張ってればいいからね」

「あ……」

もしかして、あたしのこと、氣遣って……？

かっこいい仕草でウインクした堂本さんに、それを確信して、彼女の優しさに頭を下げる。

「ごめんなさい。……ありがとうございます」

「別に、謝られることも礼を言われることも何一つしてないけどね。でも、そうだな……」

頭を上げたら、そう言った堂本さんに、いきなり顎をつかまれた。

「ひゃ!？」

すばやい動きで口の端ギリギリにチュツと音を立ててキスをされて、そこに手をあてて目を丸くすれば、今度は横からグイツと腕を引っ張られる。

「ちいっ！」

あたしを引っ張った城ヶ崎さんの怒りを含んだ声に、堂本さんが肩をすくめた。

「病院ではお静かになってね。せっかく感謝されてるみたいだから、礼をもらったただけだぞ、私は」

「お〜ま〜え〜……」

堂本さんがフフンツて笑う。

「あんまり独占欲が強いと、また嫌われるぞ? ジョウ」

「ぐっ……」

『また』を強調した堂本さんの言葉に、城ヶ崎さんが言い返せずに悔しそうにつまった。

あの時のこと、かな? 堂本さん、知ってるんだ……?

「さて、と。そういうわけで、私はこれから美人記者さんとデート

してくるかな」

腕時計をチラッと見てそう言った彼女に、城ヶ崎さんが大きなため息を吐く。

「ああ、ジョウ。記事の嘘は針の数だけでいいからな。しっかりやれよ?」

「……ああ、わかってる」

記事の嘘?

「じゃ、麻由ちゃん。そこの馬鹿をよろしく。また会おうね」

堂本さんがそう言って、首を傾げていたあたしに向って軽く手を上げてみせる。

その仕草は、すごく様になって、かつこよくて……。

「あ、はい!……本当に、ありがとうございました」

またペコッと頭を下げたら、彼女はやわらかく微笑んで、颯爽と去っていった。

……なんか、嵐のような人。

だけど……。

「麻由さん……?」

城ヶ崎さんが、堂本さんの後ろ姿が見えなくなってもぼおつとその後を見つめていたあたしに、戸惑いがちに声をかけてくる。

「堂本さんって……。なんか、かっこいいね……」

その辺の男よりよっぽど男らしくて、仕草も表情も人を惹きつける力を持ってて。

……前言撤回。あたし、彼女になら、なびくかも。

キスされても全然嫌じゃなかったもん……。

そう思って、キスされたところに手を触れたら、城ヶ崎さんから深い深いため息が聞こえた。

「だから、会わせたくなかったんだ……」

……あ、うん。納得。

エピソード

社長と副社長にさんざん言われてた呉羽さんという人は、城ヶ崎さんの秘書の一人なんだそうで、あたしと城ヶ崎さんが病院のロビーに現れると、涙目で開口一番、

「社長！遅いですよ！俺、彼女に一時間で戻るって言ってきたんですからね！？」
って、言った……。

あたし達は、社長の怪我よりも何よりも、彼女との約束を心配する薄情な秘書の飛ばす車で、城ヶ崎さんのマンションへ連れてこられた。

そして、あたしが何を言う間もなく、城ヶ崎さんと一緒にさっさと降ろされて、あっという間に、呉羽さんは去っていった。

怪我人二人を置いて、彼女の元へ。

堂本さんといい、呉羽さんといい、なんだかなあ……。

とりあえず城ヶ崎さんを部屋まで送り届けるために、彼の薬とスーツの上着を持って、エレベーターに乗り込んだら、この前酔っ払った時と同じ様に、城ヶ崎さんが、壁にもたれかかった。

その顔に少し汗が浮かんでいるのに気づいて、ハッとす。

「痛い？大丈夫？」

慌てて近寄れば、彼が痛みを堪えるように、小さく息を吐き出す。

「麻酔がきれてきたらしい。大丈夫だよ。痛み止めももらっているから……」

あたしを気遣って微笑んで見せた城ヶ崎さんに、胸がしめつけられた。

エレベーターが止まって、彼を支えるように、ゆっくりと歩く。

部屋の鍵をあけて灯りをつけて、この前より少し荒れたような気のするリビングへ、とりあえず連れて行った。

「薬……」

城ヶ崎さんにソファへ座ってもらって、急いで預かっていた薬の中から痛み止めを取り出す。それを彼に渡して、この前のように水を持って行けば、それを飲み干した彼が大きく息を吐き出した。

でも、薬が効いて来るまで、まだ時間がかかる……。

「……麻由さん？」

「ごめん、なさい……。ごめんなさい……。あたし……」

城ヶ崎さんの前に膝をついたまま、うつむいて、震える手を握り締めた。

「あたし……。あたしのせいで……。ごめんなさい……。っ！」

一生懸命堪えたけど、今日一度壊れてしまった涙腺は言うことを聞いてくれなくて、ポロポロと涙が流れていく。

堂本さんはああ言ってくれたけど、あたしは自分が許せない……。謝るしかできないけど、それで許されると思わないけど、でも……。。

「君のせいじゃないよ。僕が勝手に……」

「あたしのせい、なの！あたしが……ストーカーに狙われてるの、気づいてたのに……。外、出たりしたから……。暁にも気をつけろって言われてたのにつ……。！」

危機感がないって、暁にも言われてた。

本性出して殴ってでもやれば、幻滅して逃げていくだろうなんて、簡単に思ってた……。

……バチが当たったんだ。

「麻由さん……」

何か言おうとする城ヶ崎さんを遮るように、首を振った。

その拍子に首の傷が少し痛んだけど、こんな痛み、彼に比べれば軽すぎて嫌になる。

「違うの……。あたしが……。ずっと、人を欺いてきたから……。あ

あなたのことも……騙してたし……。いっぱい、嘘ついて……。だから、あんなのに……狙われたのも、あたしのせいだし……。あたしが悪いの……。なのに、あなたを……傷つけて……。ごめ……ごめんない……。本当に……ごめ……」

「麻由さん！」

座り込んで謝り続けていたら、城ヶ崎さんに腕を掴まれて、右手だけとは思えないほど強い力でグイッと持ち上げられた。

そのまま片手だけで力強く抱きしめられて、思わず体が固まってしまう。

「……僕が、怖い？」

「あ……」

すごく近くで聞こえてきた声の、言いたいことがわかって、ゆっくりと力を抜いた。

軽く首を横に振る。

「大丈夫。城ヶ崎さん、だから……」

確かに、男の人に対する恐怖が、ないわけじゃない。

力では、まったく敵わないってこと、今日で嫌って程わかったし。でも。

この腕は、あたしを守ってくれた腕だもの……。

そっと背中に手を伸ばして、城ヶ崎さんのぬくもりを感じた。

「よかった……」

彼が、ホッと息を吐く。

「確かに、麻由さんがストーカーのことを知っていて出かけたのは、褒められたことじゃないと、僕も思う。でも、悪いのはあのストーカーで、麻由さんじゃない。僕の怪我だって、君のせいなんかじゃないし、気にすることなんて何もない」

「でも……」

口を開こうとしたら、城ヶ崎さんの右手にさらに力がこもった。

「いいから……。僕は、麻由さんを最悪の事態から守ることができて、本当によかったって思ってる。これくらいの怪我、君を守れないことより、ずっといい……」

城ヶ崎さん……。

胸が熱くなって、あたしも力を込めて彼を抱きしめ返した。

「今日、僕が暁さんのマンションに着いた時……。麻由さんが、ちようどエレベーターに乗り込むのが見えたんだ」

城ヶ崎さんが、今日起こったことを話してくれる。

「でも、その時に、麻由さんと一緒に乗った男が、麻由さんを見てニヤッと笑ったのも見えて……」

それを聞いて、背筋を冷たいものが流れる。

あの時、あたしはあいつに背中を向けて乗ったから、気付かなかった……。

「その笑い方が、なんとなく嫌な感じだったし、その男に見覚えがあるような気がして……。ああ、麻由さんは、僕が君の家まで会いに行ったという話を、暁さんから聞いた？」

「うん……」

「結局、麻由さんには会えなかったけれど……。その時に、なんとなく視線を感じて振り向いたら、知らない男がいたんだ。睨むような目を向けてくるから、留守の家の前で途方に暮れる僕が、不審者に見えるんだろうと思って、その場は去ったんだけど……。違ったらしい。その男が、あのストーカーだったんだ」

そういえば、あの男。あたしがいなくなって心配したとか言ってた……。

暁の家にいる間も、見張ってたの……？

なぜかあたしの名前を知ってたこととか、たぶん、学校も調べて、帰りをつけられていたんだろうこととか……。自分の知らないうちに何をされていたか、考えただけでゾッとするほど気持ち悪くて、体が震えてしまう。

「麻由さん……!？」

城ヶ崎さんが焦ったように背中をさすってくれて、ゆっくりと呼吸を繰り返したら、少しずつ震えが収まってくる。

「ごめんなさい。もう、大丈夫だから……」

「いや、僕こそごめん……。嫌なことを聞かせてしまって」

そう言う彼に、もう一度『大丈夫』って、首を軽く振ったら、再び強く抱きしめられた。

「城ヶ崎さん……?」

「……本当に、無事でよかった」

耳元で呟かれた声は、絞り出すように小さくて……。

「目の前に麻由さんがいるのに、開かない扉がもどかしくて堪らなかった。『逃げろ』と叫ぶのに、全然届かなくて……。駆けつけて、麻由さんが襲われているのを見た時、体中の血が一気に逆流した気がした……」

そう言った彼の声が、震えてる。

「こんな怪我くらいどうってことない。麻由さんが怖い思いをしたことに比べれば、全然、たいしたことなんてない。もっと早く助けてあげられていれば、傷つけられることもなかったのに……」

彼の震える指が、あたしの首に巻かれた包帯を撫でた。

そっと体を離して、その手を両手で包む。

城ヶ崎さんの、悔しそうな、心配そうな顔に、自然と微笑んだ。

「平気。こんな怪我、すぐに治るもの……」

跡も残らないでしょうって、病院の先生も言ってた。

「確かに怖かったし、今でもやっぱりちょっと怖いけど……。でも、あれしきのことで壊れたりするほど、あたしは弱くないから。城ヶ崎さんが守ってくれて、暁やゆっきーや、堂本さんまで、力づけてくれて……」

こんなにも、暖かい人達に囲まれたあたしは、なんて幸せ者なんだろうって思うから……。

「しばらくは、一人になるのを怖く思ってしまうかもしれないけど、でも、きつとすぐに立ち直れる。あたしは、見た目よりずっとたくましいの。だから……」

まだ、一番大切なことを伝えてなかった。

「助けてくれて、ありがとう。すごく、うれしかった……」

城ヶ崎さんが来てくれて。

あたしのことを守ってくれて。

そう伝えて、精一杯元気よく見えるように笑ってみる。

「麻由さん……！」

掠れた声で名前を呼ばれたと思ったら、力強い腕に再び引き寄せられて、そのまま口づけられた。

……それは、強引なくせに、とても優しくて。

どうしようもなく胸が高鳴る。

「……城ヶ崎、さん……」

「麻由さん」

顔を離れた城ヶ崎さんに、あの、情熱のこもる目で、まっすぐに見つめられる。

「今度こそ……。僕の、恋人になってくれませんか？」

それは、前ここに来た時に、あたしが言わせなかった言葉で……。

うれしさや、罪悪感や、恐怖……色んな複雑な感情が浮かんで、胸が苦しくなる。

「……あたし、ひどいこと、たくさん言った」

あの日、車の中で。

「それは、僕が君を怒らせたから……」

確かに、そうだけど。

でも。

「あたしは、城ヶ崎さんを騙してたの……。城ヶ崎さんが好きだって言ってくれたあたしは、本当のあたしじゃない。本当のあたしは、全然かわいくなかないの……。それでも、それをわかってても、好きだって、言えるの？」

言って、くれるの？

恋人同士になって、『やっぱり無理』って言われるのなんて、絶対にイヤ……。

「言える」

城ヶ崎さんがきっぱりと言い切って、うなずいた。

……本当に？ 本当に、あたしを全部、受け入れてくれるの？

「どう、して……？ だって、城ヶ崎さんは猫被ったあたしが好きだったんでしょ？」

あの、かわいこぶったあたしを好きになったのなら、本当のあたしを受け入れるなんてこと、できるわけない……。

自分で言うのもなんだけど、真逆だと思うし……。

城ヶ崎さんが、不安に揺れるあたしの手を取って、握り締めてくれる。

安心させるように、優しく……。

「僕は、猫を被っていた君も、怒って感情むき出しにした君も、全部好きだ。だって………知っていたから」

「え？」

知ってた……？あたしを？

「麻由さんは、僕を騙していたというけど、僕は騙されていたことなんて一度もないんだ」

「それって……。一度もって……。まさか、“cocoon”で会う前から？」

驚いてそう聞いたら、城ヶ崎さんが、すまなそうに『うん』となずく。

ええ……！？

「あ！そういえば、堂本さんが初恋の君がどうのって……」

病院で、彼女が言っていたことを思い出す。

彼女の言うジョウは城ヶ崎さんのことだったんだから、あたしが彼の初恋の君……？

……でも、あたし、城ヶ崎さんのこと、まったく記憶にないんだけど。

「ちいの奴……」

城ヶ崎さんがため息をついて、苦笑する。

「まあ、今となっては、隠すつもりもないからいいけれど。僕が下手に隠したりしたから、ややこしくなったんだって、ちいにも馬鹿にされたし……」

「じゃあ、じゃあ、本当に……？でも、あたし、全然心当たりが……。ごめんなさい」

城ヶ崎直人という名前にも、彼の力強い目にも、まったく覚えがない。

なのに、申し訳なくて必死に思い出そうとしている横で、城ヶ崎さんがクスクスと笑う。

「？」

「麻由さんが覚えてないのは、仕方がないと思うよ。僕が君と出会った時、すでに君は泥酔状態だったから」

でいすい……泥酔っ!？

「え？うそ……!？でも、あたし、お酒にはかなり強いし、酔って記憶を失ったことなんて一度も……あ。一回だけ、あるけど……ええ!？」

その可能性に気づいて、驚く。

だって、それは、あの中学生の時、初めてやけ酒したあの日のこととで……。

「出会いは、人気のない橋の下。麻由さんは中学生で、僕は高校生だった。一升瓶抱えて目を据わらせた美少女を見て、さすがに目を疑ったつけ……」

ぎゃあーっ！あれを知ってる人がいるなんてえ……！

しかも、そんなに懐かしむような顔、しないで……。

あまりに恥ずかしすぎて、顔に熱が上がってく。

「も、もしかして、あの日あたしを運んでくれた通りすがりの優しい人って……」

まさか……。

「ああ、僕のことだと思う」

……お母さん、高校生だったなんて言わなかったじゃないの！

なんでそんな特徴的なことすつとばすかな、あの人は！てっきりどこぞのおじさんのお世話になったんだと思ってたじゃない、今まで……。

ああっ、そうだ！お母さんといえば……。

「……その時、お母さんに、なんか言わなかった？」

「『がんばるって伝えてください』って、言ったかな、確か」

ああ、うん、そうそう！確かにそんなことは聞いた気がする。

……その伝言の意味は、さっぱりわかんなかったんだけど。

二日酔いの気持ち悪さで唸ってる娘の背をさすりながら、お母さんが『説教上戸だったのねえ。誰に似たのかしら？』とかなんとか、とぼけたこと言ってたのを覚えてる。

「あたし、何したの……？」

ものすごく聞きたいような、聞きたくないような……。

なんか、暁の気持ちが初めてわかった気がする……。

すごく複雑な表情をしたのかもしれない。城ヶ崎さんが、あたしの顔を見て、小さく笑った。

「そんなに怖がらなくても……。僕にとってあれば、運命の出会いなのに。あの時、麻由さんに会っていなかったら、今の僕はいない。それくらい、麻由さんは僕に大きなものをくれたんだ」

城ヶ崎さんが大きくうなずいて、優しく微笑んだ。

絶対、そんなの嘘だ。酔っ払ったあたしなんて、自分でもわからないけど、でも、絶対なんかしてかしてる気がする。

ビクビクしてるあたしとは対照的に、城ヶ崎さんが懐かしそうな

顔で話してくれる。

「あの頃の僕は、今とは比べようもないくらいチビで、おまけに食べるのが好きだったから、すごく太っていて……。何をやって人も人並みにできないし、学校ではいじめられるし、もう何もかもが嫌になっていたんだ。麻由さんに会ったあの日、僕は……。死ぬつもりだった」

「えっ!？」

コロコロしてた城ヶ崎さんも想像付かないけど、自殺しようとしてたって……。うそでしょ？

「信じられないかもしれないけど、本当にその時は死のうと思っていたんだ。麻由さんに会ったのも、僕が死に場所を探していた時だったしね」

……。言われてみれば、あんな辺鄙な場所に人が通りかかるのも、変かも。

「完全に酔っ払い状態の君を見て驚いていた僕を、君は『一緒に飲もう』と誘った……。というか、半ば強制的に誘われたって言った方がいいかな。初めは、君が恋人に振られた話を聞いたりしていたけど、一緒に飲んでいるうちに、僕もだんだん酔いが回ってきて、いつの間にか、死のうとしていることを君に話していた」

かなり穏やかな言い方で話してくれてるけど、あたしのことだから、きつと無理やり飲ませて、愚痴を聞かせていたんだろうなあ……。。

……なんか、いたたまれない。

「それで、それを聞いた麻由さんは、なんて言ったと思う？」

城ヶ崎さんが、なぜか楽しそうにクスクスと笑う。

「……なんか、まともなことを言ったとは思えないんだけど」

あたしだから。しかも酔っ払いだから。

「まともかどうかは別として、確かに、びっくりはした。……『じゃ、死ねば』って言われたから」

「……………」

……あゝ、言いそう。ものすごく、言いそう。

「すごくあっさりと、さあどうぞって感じで。……僕は、確かに死ぬのと思っていたし、君に会わなければ間違いなくそうしていたと思う。でも、なぜか、君にそう言われたら、突然死ぬのが怖くなったんだ。自分でも不思議だけど、あの時『死んだらダメ』と言われていたら、逆に死んでいたかもしれない」

『天邪鬼あまのじゃくだよね』って城ヶ崎さんが笑う。

「その後も、麻由さんが言うことはすごくもつともで……。僕には、君がすごく格好よく見えた。いつの間にか、死ぬのうと思っていた気がなくなっちゃって、眠ってしまった麻由さんをおぶって歩く頃には、がんばってみようと思えるようになっていたんだ。……ああ、そういえば、まだお礼を言ってなかったな。あの時はありがとう、麻由

さん」

「うっ……」

城ヶ崎さんに頭を下げられて、あたしの顔はさらに赤くなっただと思う。

あたしが一体どんなことを言ったのかは知らないけど、覚えてないだけに、恥ずかしい。恥ずかしすぎる。

「そ、それが、初恋……？」

それが本当なら、かなり物好きだよね……。

「うーん。初恋、なのかな。ちいはそう言うけれど……。僕にとっては、麻由さんは命の恩人だし、初恋なんて簡単なものには納まらないくらい大きな存在だったから。麻由さんのおかげで、ダイエツトする気にもなったし、いじめられなくもなったし、勉強もがんばるようになったし……。そう考えると、j o - d o だって、麻由さんのおかげということに……」

……あたしって、実は、すごい人？

「……“ c o c c o o n ” で会った時、あたしだって、すぐにわかった？」

「入ってきた時に、もしかして、とは思った。でも、名前が聞こえてくるまでは、確信が持てなくて。君が本当にあの時の麻由さんだとわかった時は、『運命だ！』って、ガラにもないことを叫びそうだったけれど」

城ヶ崎さんが照れくさそうに笑う。

「あたしが覚えてなくて、がっかりしなかったの？」

「覚えているとは思ってなかったからね。僕もすっかり変わってしまっているだろうし、もし君が覚えていたとしても、気づかれない自信があった。あの橋の下にいた僕は、ものすごく格好悪かったから、君が覚えてないなら、その方がいいとも思っていたし。あんな恥ずかしいことをしたり、歳を聞いたりしてあくまで初対面を装って……」

“c o c c o o n”で初めて会った時のことを、思い出す。

『あちらのお客さまからです』っていうのがおもしろそうって、乗ったんだっけ……。

まさか、そんな事情があったなんて……。

「でも、結果として、隠していたせいで君を傷つけることになってしまって、今では後悔してる。まさか君が車を飛び出してしまうなんて思わなくて、ああなるはずじゃなかったんだけど……。あの時は、ごめん。暁さんのことも……。その前の鬱陶しい電話とかメールも……。ごめん。ずっと、謝りたかった」

じゃあ、やっぱり、あの、独占欲が強くて自己チューだった城ヶ崎さんは、嘘ってこと？

でも、なんのために、そんなことを……？

もしかして、あたしを怒らせるため？

だとしたら、なんで……？

「どういう、こと……？」

城ヶ崎さんが、下げていた頭を、ゆっくりと上げた。

そこには、ものすごく申し訳なさそうな顔があって……。

「再会した麻由さんは、僕の知っている格好いい君とは違って、とてもかわいらしい人になっていたよね。麻由さんはそれを、猫を被っていたと言うけれど、僕には、君が変わってしまったように見えて、それが……少し、ショックだったんだ」

「……………」

「でも初めは、遠慮しているんだろうと思った。だけど、どれだけ親しくなっても麻由さんは、かわいい人のままで……。いや、それが嫌だったわけじゃないんだ。もしかしたら、性格が変わるような出来事が起きたのかもしれないと思ったし。僕にとって、麻由さんと出会ったことがそうだったように、人にはそういう転機が訪れることがあるから……。でも、君にどんどん惹かれていったのは確かだから」

……今、気づいた。

城ヶ崎さんが時々戸惑ったような、考え込むような仕草をしていたのは、あたしが特にかわいさを装った時だったんだ。

元のあたしを知ってれば、そりゃあ、戸惑いもする……。

「でも、あの日。しつこいナンパにも自分を崩さなかった君が、連れて行ってくれた店が“かっちゃん”で……。確かにあの店はいい店だけれど、大將が身内だっていうのを抜きにしても、再会してからの君にはそぐわない雰囲気だと思った。どちらかというと、昔の君を思い出させる店だな、と……。しかも君は、どこの店にいる時よりも楽しそうにしていたよね？」

城ヶ崎さんの問いに、コクツとうなずく。

そりゃあもう、楽しかったもの。城ヶ崎さんが“かっちゃん”を気に入ってくれたから……。

「だから、もしかしたら麻由さんは自分を偽っているんじゃないかと、そう思った。でも、僕にはその理由がどうしてもわからなくて……。ただ、君の全部が好きだと、そう伝えるしかなかった」

う、そ……。

あれは……。あの日の告白は……。本当に、そのままの意味だったっていうの……？

「あたし……。中学の時もそうだったみたいに、ずっとあれからも外見と中身のギャップで好きな人に振られ続けてきたの。それが、辛くて……。中身を外見に合うように作ってやろうって……」

「うん」

「あの日、城ヶ崎さんが、あたしの全部を好きだって言ってくれた

時も、本当は、すごくうれしかった。でも、あなたの知ってるあたしは、作り物のあたしだから……そう思ったら、急に悲しくなって逃げ出しちゃった……」

もしかして、城ヶ崎さんは……。

城ヶ崎さんの態度が急に変わったのは……。

あたしを怒らせたのが、わざとだったなら……。

彼のやりたかったことに思い当たって、涙が零れ落ちた。

「麻由さんがひどく悲しそうな顔で帰って行った後、僕も、もしかしたら……って、そのことに気づいた。初めて会った時のことも、あったし。でも、確信は持てなくて……」

城ヶ崎さんが、あたしの零れた涙を、暖かい手で拭ってくれる。

「だから、どうやったらそれを確かめられて、そのうえ、君の全てを好きなことが伝えられるだろうと考えた。それで、怒らせたいんじゃないかと……。怒って、君が本当の自分をさらけ出すことができた時に、好きだと伝えられたら。そう、思ったんだ。……失敗したけど」

ごめんって、城ヶ崎さんが、苦笑気味に謝る。

車を降りたあたしに、城ヶ崎さんは何かを必死で叫んだ。

電話も、メールも、そのことを伝えたかったから……？

「あの後、仕事が忙しくなって、なんとか会いに行きたかったけど、それすら時間がなくて……。電話もメールも反応がないし、途方に暮れていたんだ。ようやく訪ねる時間ができた時には、君はいなかったし……。自分がしでかした失敗の大きさに、今更気づかされて後悔した。早く謝りたくて……。正直、つらかった」

そう言って、また苦笑した城ヶ崎さんの胸を、トンツと叩く。

……。信じらない。

あたし達、すごい遠回りしてた……。

うれしいのとホツとしたのと呆れたのとで、ボロボロと涙が零れた。

すっごくひどい顔になってることは、わかってたけど、止まらない……。い……。

「もお……。城ヶ崎さんのほかあ……。！」

力の入らない手で、何度も彼の胸を叩く。

「うん、ごめん」

「わかりにくいしっ……」

「うん、そうだよね……。ごめん」

「言ってくればっ……。よかったのに……。初めっから……」

「今ではそう思ってる。ごめん」

「絶対っ…嫌われたって……思ったんだからねっ……」

「嫌いになんてならない。好きだよ、本当に。自分でもどうしようもないくらい、好きなんだ。麻由さんの全てが……」

再び繰り返されたその言葉に、涙の量が倍増する。

城ヶ崎さんが、動かせる右手で拭ってくれるけど、それでも涙は次から次へとあふれ出す。

……あたしの、気持ちみたいに。

「……ずっと、ずうっと……忘れられなくてっ……」

「ごめ……ん？え？」

流れでまた謝ろうとした城ヶ崎さんが、あれ？って、聞き返す。

「忘れようって……お酒、飲むのに……城ヶ崎さん……消えてくれなくて……」

「麻由さん……」

やけ酒が、効かなくて。

暁と一緒に涙を流しても、それでも忘れることができなかった。

涙を拭う途中で止まっていた彼の手を、両手でそっと握り締めた。

「会いたくて……。でも、怖くて……。だけど、やっぱり……。会いた、くて……」

……その人が、今日の前にいることが、こんなにもうれしいの。

「好き」

本当の自分でこの言葉が言える日が来るなんて、もう二度とない
と思ってた。

「大好きなの……。あたしを……城ヶ崎さんの、恋人にしてくれる
……？」

うれしそうに笑顔を浮かべた城ヶ崎さんの腕が伸びてきて、それに
引き寄せられるようにあたしも彼を抱きしめた。

何度も、キスを繰り返して。

その度に、クスクスと笑いあって。

「これで、ちいに馬鹿にされないかな」

そう言って、ニンマリと笑った城ヶ崎さんに聞いたら、記事の嘘
がどうとかっていうのは、見出しの『恋人守って』っていう部分の
ことだったらしくて。

あんな風に、あたしのことを好みだとかなんとか言ってたのに、

あたし達のこと、彼女なりに心配してくれてたのかなって思うと、やっぱりいい人だなあって思う。

「また会いたいなあ、堂本さ……」

「却下」

仲良くなれそうな気がするって、そう思ったただけなのに、人のセリフさえぎってまで、即効で否定された。

『え〜』って、城ヶ崎さんを見たら、ものすっごく苦い顔をしてて、笑ってしまう。

「やきもち?」

意地悪くそう聞いてあげたら、彼が難しい顔して唸った。

「……………悪い?」

はあくって、大きなため息をついて、少し不安そうにそう言うから。

「悪くない」

笑って、もう一度キスをした。

おまけ。

快気祝いで訪れた“c o c o o n”で、木島さんがこっそり教えてくれた。

「この店の名付け親は、オーナーなんですよ」
って。

それは……もしかして……。

……………。

……………。

……………恥ずかしい真似をつ！

思わず顔を赤くしてしまったあたしに、

「どうした？」

なんて、とぼけた顔で聞くもんだから。

思わず、叩いちゃった……。

|
E
N
D
|

エピローグ（後書き）

これにて『恋愛事情2 〱麻由の場合』完結です。

ここまでお付き合い下さいました皆様、本当に、ありがとうございます。

近いうちに、番外編を載せる予定です。

その後、『暁の場合』の方でも、少し載せられたらなと思っています。

よろしければ、お付き合い下さいね。

番外編 「出会いは橋の下で」 (前書き)

2人の出会いは編です。

今回は、直人視点にてお送りします。

番外編 「出会いは橋の下で」

その日、僕は、死ぬはずだった。

子供の頃から背が低くて、しかもコロコロと太っていた僕は、いわゆる‘チビデブ’というやつで。

そのうち成長期に入れば、背も伸びるだろうと思ったけれど、周りとぐんぐん差がついていく中で、僕には一向に成長期なんてものが訪れる気配もなく、高校2年になった今もまだ、‘チビデブ’のままだった。

運動もできないし、勉強も好きじゃない。

唯一、人に自慢できることがあるとすれば、パソコンくらいかもしれない。でも、それにしたって、‘オタク’って言われるだけで、誰に褒められることもない。

中学の頃からイジメが始まって、高校に入ったらそれもおさまるかと思っただけれど、全然ダメだった。

相変わらず、使えばしりのいじめられっ子ってやつ……。

親は忙しく働いていて、僕のことにも何も気づかない。

教師も、暴力に発展していないイジメなんて、なんとも思わないらしい。

……何もかもが、嫌だった。

いじめるやつらも、子供に無関心の親や教師も。

何よりも、こんな自分が。

大嫌いだった。

死んで楽になれるなら、死んでしまおうって、そう思った。

……もう、疲れたんだ。

冬も山場を迎えていて、凍えるような冷たい風が吹いていた。

僕は最適な死に場所を目指して、コートを羽織ると、家を後にした。

遺書くらいあった方がいいだろうかとも考えたけれど、僕が死ねば、周りが勝手にその理由を解釈してくれるだろうと思って、やめた。

……大体、何を書いたらいいのかなんてわからない。

その女の子を見つけたのは、僕の家から割と離れた所にある、あまりきれいとはいいがたい橋の、その下だった。

僕は、橋から飛び降りて死ぬのもありかなって、川の深さを見に下りてきて、彼女に気づいた。

……すごい美少女。

中学の制服にコートを羽織ったその女の子は、すっごくかわいい、人形のような子だった。

……………。

……………酔っ払いだったけど。

なぜかその美少女は一升瓶を抱えていて、僕に気づいて上げた顔は、明らかに酔っている顔。

顔も赤いし、目が据わってる。

「……………」

「……………」

……………見なかったことにしよう。

一瞬だけ見つめあって、僕はクルツときびすを返した。

あの子のためにも、関わり合いにならない方がいいと思ったから。

……なのに。

「おい、そのチビデブ高校生」

うっ……！

今、痛いところを、グサツて、グサツて……。

直球で傷つけられながらも、おそろおそろ振り向いた僕に、その美少女が据わった目でこっちを睨む。

「あきらかに、『見てはいけないものを見ちゃいました』って顔してんじゃないわよ」

「ご、ごめん……」

絡み酒か……。

「まったく。男なんてどいつもこいつも同じ。人の外見だけ見て判断しやがって……。あたしみたいなかわいげなのが、酒飲んじや悪いかっての」

……ダメだろ。かわいい云々の前に、中学生なんだから。

思わず内心で突っ込みながらも、彼女の言った言葉が気になって、立ち止まったまま、動けなくなった。

『人の外見だけ見て判断しやがって』

彼女が、そう言ったから……。

「あ、あの……君……」

「何よ？言いたいことあんなら、はっきり言えっ！」

「は、はい！……あの！なんで、こんなところで、お酒飲んでるのがなって」

先生に叱られた子供みたいに、つい返事をして聞いたら、美少女が呆れたようにフンツて笑った。

鼻で。

「ばっかじゃないの？家じゃ親の目があって、飲めないからじゃない」

……いや、そういう意味じゃなくて。

「なんで、お酒飲んでるの？」

「酔っ払いたいから」

そりゃ、そうだろうけど……。

「どうして酔っ払いたいの？」

「……忘れたいことがあるから。大人はそういう時に、やけ酒する

んだって」

……やけ酒。

中学生が、やけ酒って……。

「嫌なこと、あったんだ？」

「まあね」

そう答えた美少女が、何を思ったか、チヨイチヨイと僕を手招きする。

「？」

つい、その手招きに従って近づいたら、いきなり腕をとられて、彼女にグイッと引っ張られてしまった。

「うわっ!?!……な、なにす……」

「座れ」

慌てて手をついて、彼女の横に膝をついた僕に、彼女がそう言う。

……いや、なんで僕が？

「お兄さん、あたしの失恋話、聞いてくれるんでしょ？」

……別に、そんなつもりはなかったんだけど。っていうか、失恋したんだね？

「聞くんでしょ？」

「え？」

「聞・く・ん・だ・よ・ね？」

「あ、はい……。聞きたい、です」

さらに念を押されて、その迫力に思わず頷いたら、彼女が『よし』
って、ニコツと笑った。

その顔がかわいくて、つい見とれてしまう。

そして、こんなかわいい子でも失恋することがあるんだということに、興味を引かれた。

「お兄さんも、飲む？」

「いや、僕は……」

彼女が、カバンから新しい紙コップを取り出して、僕が断るのを無視してなみなみと日本酒を注ぐ。

「飲め」

「はい……」

笑顔で強制的に渡されて、無理やり乾杯もさせられて、仕方なくそれに口をつけた。正月くらいしか飲むことのない日本酒特有の香

りが、口の中に広がる。

ものすごく冷たくて、一瞬身震いした。

でも、なんか、おいしいかもしれない……。

「大人はね、失恋したらやけ酒するんだって。この前、ドラマで見たの。でも、確かに気持ちいいよねえ、お酒って」

誰もが失恋Ⅱやけ酒じゃないと思うけど……。

アルコールで赤くなった彼女が、ほうっと気だるげにため息をつく。

その顔が、中学生とは思えないくらい大人っぽくて、ドキッとさせられた。

「そ、それで？ 君みたいなかわいい子が、なんで失恋なんてしたの？」

ごまかすように尋ねたら、彼女の顔がムッツとしかめられた。

「……かわいくないから」

「へ？」

何を言ってるんだ、この子は？

さっきは自分でかわいいって言ってたじゃないか……。

やっぱり、酔っ払いだから、わけわからないんだろうか？

「あたしね、付き合ってる人がいたの」

僕の疑問を無視して、彼女が話し始めた。

「同じクラスの人で、結構かっこよくて、サンタっていうの。トナカイ連れてそうな名前だけど」

サンタクロース……。

「半年前に向こうから『付き合おう』って言ってきて、あたしもうなずいて。で、付き合うことになったんだけど……。大人から見れば、おままごとみたいでも、あたしたちは結構楽しく恋愛してたと思うんだ。一緒に海に行ったり、買い物したり、手をつないで……」

ちょっと懐かしむみたいに、彼女がクスツと笑った。

でも、一瞬でその笑みは消えてしまう。

「でもね、でも……。終わっちゃった」

うつむいた彼女の瞳が、濡れていることに気づく。

僕が来るまで、ずっと泣いていたのかもしれない。

「……なんで？」

僕は、紙コップに入った酒を半分ほど飲み干して、彼女に聞く。

だんだん、体が熱くなってきた。

「サンタが、浮気したから」

浮気、ですか……。

「他の子と、手をつないでたの。すっごく、仲良さそうに……。キスしてたわけじゃないけど、それでも、浮気は浮気だもん」

キ、キスって……!?

……僕にはまだそんな経験、ありませんが。

サラッと言っちゃうあたり、彼女はサンタと経験済み……なんだろうなあ……。

勝手にドキドキしてるのを気づかれないように、お酒を飲み干した。

彼女がすかさず、僕のカップにお酒を注ぐ。

「それでね、あたし、ムカついちゃって」

「うん。そりゃあ、ムカつくだろうね」

……悲しかっただろうね。

「ね? だから、二人が手をつないでるのを引き離して、『浮気者!』って。……そこにあった辞典を投げてやったの」

あはははは………こわっ。

「ちゃんと、当たらないように投げてあげただけ、自分でもえらいって思うけどさ。でも、たとえ当たっちゃったとしても、サンタが悪いんだもん。少しくらい痛い思いしても良かったんだ……」

「結構激しい人なんだね、君って……」

外見がどうか言ってたのが、わかった気がする。

見た目はとてもそんなことをするような女の子には見えないから。泣いて、『浮気するなんてひどいよ』って、逃げ出しちゃいそうな子に見えるから……。

「そう、かもしれない。……でも、あたし、間違ったことしてない。怒って当たり前だって、今でもそう思うもん」

まあ、確かに。

悪いのは男の方だと、僕も思う。

「それで？」

先を促したら、彼女がちよっとつまった。

「？」

「………サンタに、『お前って、かわいいの見た目だけだよな』って言われた」

あゝ……。

まあ、確かに、僕も彼女は激しい人だと思ったけど、でも、いくらなんでも、それはひどいんじゃないだろうか？

半年付き合っけ言うセリフがそれって……。

彼女が泣くのも、無理はないよなあ。

そう思っけ、同情気味に彼女へ目をやったら、彼女がコブシを握り締めて、空を睨んでいた。

あれ？

「あたし、ムカついて！だっけ、それっけ、性格悪いっけ言われたんだよね？半年も付き合っけきて、あたしっけ顔だけだったわけ？ふざけんっけ、思うでしょ！？」

「う、うん……」

「だから、殴っけやったの！」

……………。

……………強いね。

「……そっか。殴っけやったんだ」

「うんっ」

勢いよくうなずいて、コップに残っていた酒を飲み干した彼女に、
なんだか、無性におかしくなって、思わず笑ってしまった。

「君って……かっこいいね」

本当に、そう思った。

死のうとしてる僕から見たら、彼女の強さは輝くみたいにかっこいい。

「そう？」

「うん」

コップを空にした彼女に、今度は僕がお酒を注いであげた。

「ふうん……。ま、ありがと」

「うん」

ついでに僕の分も注いで、チビリと飲む。

僕も、大分酔っ払ったみたいだ。

風の冷たいのが気にならなくなってきていた。

「そういえば、お兄さんは、なんでこんなところにいたの？ あたし、誰もいないところを探してきたから、人が来てびっくりしたんだけど」

一通り自分の愚痴を言って、多少は気が晴れたらしい。

そんなあっけらかんとした彼女の、今さらながらの問いかけに、僕は、なぜか意外なほどあっさりと答えていた。

「うん……。まあ、死のうと思って」と。

どんな反応をするだろうと、彼女を見れば、驚いたように目を丸くしている。

そりゃあ、驚くよな。

「なんで？」

「……なんか、疲れてしまったんだ。学校ではいじめられるし、勉強も運動も、何をやってもうまくいなくて。何もかも、嫌になっ
て……。疲れて。楽に、なりたくて」

お酒のせいもあるんだろうけど、スルスルツと言葉が出てきた。

こんな話を聞かされて、彼女はいい迷惑かもしれない。

……でも。

彼女は、『死んだらダメだよ』って、止めてくれるだろうか？

止められたら、今日はやめてもいいかもな……。

「ふうん……。じゃ、死ねば？」

.....。

.....あれ？

当然止める言葉が出てくるんだろうって思ってた僕は、彼女の発した言葉を理解するのに、数秒の時間が必要だった。

今、死ねばって、言った？

「これ飲んでるから、少しは苦しくなく死ねるかもよ？やってみたことないから、わかんないけど」

これ、と指差されたのは一升瓶。

ああ、お酒飲んでから死ぬ人がいるって聞いたことある、けど……。

「ああ、冥土の土産に、あたしの愚痴なんか聞かせちゃってごめんね。きれいさっぱり忘れてくれていいから。何にも気にせず、どうぞ、いつてらっしゃい」

それは、いいけど……って、いつてらっしゃって、何!？

……いやいや、そうじゃなくて！

「えっと……。止めないの……？」

「なんで、あたしが止めなくちゃいけないの？」

即答した彼女に、それもそうか、と妙に納得させられてしまう。

「そうだよね……」

僕と彼女は赤の他人で。

お互いの名前も知らなくて。

僕が死のうがどうしようが、彼女には、全然、まったく、これっぽっちも関係なくて……。

……なんでだろう。

そう考えたら急に、死にたかった気持ちだが、揺れ始めた。

「……聞いても、いいかな？」

「ん？」

チビチビとお酒を飲み続けている彼女に、無性に聞いてみたくなつた。

「君は、死にたいと思ったことはないの？」

彼女みたいに強い人は、そんなことを考えたこともないのかもしれない、そう思ったから……。

「あるよ、それくらい。今だって、ちょっと思わないでもない」

あるんだ、彼女のように強い人でも……。

「じゃあ、なんで実行しないの？」

生きることが嫌になるから、死にたいと思う。

死ねば、楽になるだろ？ 苦しみから、解き放たれるじゃないか……。

彼女が、肩をすくめて僕に言う。

「だって、死んだら楽になるって、誰が決めたの？」

「え？」

「死んだ人がそう言った？ 自殺した人が、ああ、死んでよかったな
って言った？」

「……………」

……目からウロコ、それはこういう時のことを言うんだと、初めて知った。

死んだら楽になれる。

ずっと、そう思っていたから……。

「確かに、苦しい今からは逃げられるかもしれないよ？ でも、その後にもっと苦しいものが待ってたらどうするの？ ほら、昔から言うじゃない？ 天国と地獄があるとかって。あたしも、それを信じてるわけじゃないけど、もしそんなのがあるなら、地獄に行くのなんて

真っ平ごめんって、そう思うんだけど」

「地獄……」

子供らしい発想といえば、そうなのかもしれないけど……。

「あくまで例えだよ、例え。死んだらただ、何にもなくなって、自分がいなくなる。それだけならいい。でも、もしそうじゃなくて、もっと苦しい世界が待っていたら？それがわからないから、あたしは死ぬのは嫌だなんて思うの。……っていうか、そういう風に考えたら、少しでも楽しいことがあるこっちの世界の方がいいって、思えるじゃない？」

美少女がニコツと笑う。

「お兄さんが死ぬのは自由。あたしは止めないよ。これはあくまであたしの考え方だもん。だけどね、一つ言わせてもらえるなら……」

「なに？」

「お兄さん、ダサイ」

顔を思いっきりしかめて言われた言葉に、グッサリと傷つく。

「ダ、ダサイ、かな？僕……」

彼女が、かわいくアクビをしてから、うなずいた。

……ものすつごく、他人事^{ちんじ}。

「うん。だって、運動できないのも、勉強できないのも、その体型だって、自分の責任でしょ？僕は何やってもダメなんだ」って、あきらめちゃってる人が、なにかをできるようにするとは思えないもん。ダメダメな自分を全部何かのせいにしてるお兄さんはあゝ、かっこ悪い！」

「う……」

「あたしだって、勉強は嫌いだよ。でもさ、勉強をがんばったおかげで、楽しい未来の可能性が増えるなら、あきらめたくないなって思う……」

抱えた膝に顎を乗せて、まっすぐに前を見つめる彼女が、すごくかっこよかった。

ちょっと、眠そうだったけど。

「……………」

彼女は、どこまでも前向きで、強くて、かっこよくて。

今までは、そういう人を見ても、『僕とは違うから』って、そう思ってた。できる人が言うことだって、初めから僕には無理だと思きらめてきた。

でも。

……僕も、彼女のようになれるかな。

初めて、そう思った。

これだけかわいくて、なのに恋人に振られちゃったと泣く彼女が、一升瓶を抱えて目を据わらせている彼女が、僕にも少し、身近に感じたからかもしれないし、お酒の力もあったのかもしれない。

でも、それでも。

せめて、彼女にダサイと言われないような男になれたら……。

もしかしたら、僕にも楽しい未来が待っているんじゃないかって。

今、ここであきらめてしまうのは、もったいないんじゃないかって。

彼女がそうしたように、顔をあげて、まっすぐに前を見つめてみる。

……よし！

「僕、頑張ってみるよ！」

一大決心で、横を向いて、彼女へそう言ったら……。

……。

………ありえない。

「寝てる……」

寝ちゃってるよ、この子！

「君？えっと……ねえ……！」

立てた膝に顔をうずめたまま、彼女はやすらかな寝息をたてていた。

軽く揺すってみたけど、まったく起きる様子のない彼女に、困ってしまふ。

一度寝入ったら、ちよつとやさつとじゃ起きないタイプか。しかも、今は酒入りだし……。

彼女が抱えていた一升瓶は、半分以上なくなっていた。

あゝ、もう。どんだけ飲んだんだよ……。

話し方は、結構しっかりしてたから、油断した。

やっぱり、泥酔状態だったんだね……。

「なんか、名前と住所のわかるものは……」

全然起きない彼女をこのまま放っておけば、確実に凍死する。

そんなの冗談じゃないから、彼女には悪いけど、勝手にカバンを漁らせてもらったら、学生証が出てきた。

‘ 2—5 15 各務麻由，

かがみまゆ……。

ありがたいことに、彼女の住所もわかった。ここからそんなに遠くない。

タクシーを呼ぶことも考えたけど、僕らは未成年の上にかなり酔っ払っているし、それはまずいだろうと思って、彼女をおぶっていくことにした。

幸いに僕はお酒に弱い方ではないらしくて、彼女をおぶってもフラフラすることはなさそうだ。

「よいしょっと……」

僕におぶわれても目を覚まそうとしない彼女に苦笑しながらも、彼女を落としてしまわないよう、気をつけて歩いた。

……各務麻由。

僕の命の恩人である、その名前を忘れないように、彼女の家に着くまで、繰り返しつぶやいた。

僕の背中に伝わる彼女の熱は、とても暖かくて……。

勇気が湧いてくる気がした。

僕、がんばってみるよ。

いつか、もし、君にまた会えたら。

せめて、ダサいって言われない男になっていたいな……。

……また、あの人は。

待ち合わせ時間に少し遅れて到着したら、彼女が、今日は3人の男に囲まれているのを見て、頭を抱えなくなる。

ツカツカと足音高く近づけば、僕に気づいた彼女がニコツと愛らしく微笑んだ。

か、かわいいっ……とか、思ってる場合じゃない。

「僕の連れに何か用かな？」

3人の男たちから彼女を守るように抱き寄せて睨みつけたら、男たちがひきつった顔を見合わせた。

……あの日から10年余りの月日が流れて、遅れてきた成長期のおかげで、僕の身長は180cmを越えている。気を緩めれば太ってしまう体質も、気をつけて太らないようにしていた。

少なくとも、今日の前にいる3人の男たちには負けない自信があった。

あの日、死のうと思っていた僕は、もういない。

もう一度、彼らを見下ろすように睨んだら、今度は蜘蛛の子を散らすように逃げていった。

……どうやら僕の睨みは、かなり怖いらしいので。

「やっぱり直くんの睨みが一番利くよね」

クスクスと楽しそうに笑う彼女に、大きなため息が出る。

なんでそんなにのん気なんだ、君は……。

「まゝゆゝ……。なんでもっと強く言っただけで蹴散らさないんだ？ 君にはできるだろ？」

各務麻由。

僕の恩人で、今は僕の大切な、恋人。

……だけど、困った恋人だ。

「だってえ、直くんがそろそろ来ると思ったんだもの。それなら、ひと睨みで蹴散らしてもらった方がいいかなって」

小首を傾げてそう言った彼女は、かわいい。ものすごく。

そりゃ、昔もかわいかったけれども。

僕と再会するまでの間に、彼女は自分の心を守るための鎧を身につけるようになっていて。今は、僕や友人の前では外してくれるよ

うになったけれど、それでもまだ他の人にはあまり外さない。

それでもって、この鎧というやつがやっかいで。

麻由のかわいさに磨きがかかって、男どもが寄ってくる、寄ってくる……。

……そして、麻由もそれを楽しんでいる節があるから、たちが悪い。

じいっと麻由を見下ろしていた僕に、彼女が膨れた。

「そんなに怒んなくてもいいじゃない。ナンパなんて、そのうちにされなくなるよ」

麻由がそう言う。

……君の場合、30を過ぎても普通にされてる気がするよ、僕は。

「直くん？」

特大のため息をついた僕を、麻由が顔色を窺うように見上げた。

「あゝ、もう……。僕が嫌なんだ」

「うん？」

「麻由が、他の男に言い寄られているのを見るのが」

困り果てて、癖で顔を撫でた僕に、麻由がクスクスツと笑った。

笑い事じゃないんだけどなあ、僕的には……。

「実は、やきもち焼きさんだよな？」

悪かったな。その通りだよ。

前に、麻由を怒らせようと、'独占欲の固まりな僕'、というやつを演じたことがあったけれど、今になって、あれはまんざら嘘でもなかったんだなって、思わせられてる。

……。
できることなら、麻由を閉じ込めておきたいくらいなんだから……。

「……嫉妬深い僕は、格好悪い？」

昔の君に言わせたら、ダサイ？

せめて、君にダサイと言われない男になりたいと思っているんだけどな。

その問いに、僕をまっすぐに見上げた麻由が、何を思ったか、チヨイチヨイツと手招きする。

「？」

それに誘われるように頭を下げたら。

……麻由が、いきなり、小さな背を精一杯伸ばして、僕にキスをした。

「ま、まゆっ!？」

人がたくさんいるのに!

驚いた僕の、真っ赤になっているだろう顔を見た麻由が、いたずらっぽく笑う。

「直くんは、かっこいいよ」

「!」

……………ははっ。

参った。

僕は、口元が緩んでしまうのを隠すために。

彼女を抱きしめて、キスを返した。

……やっぱり、君にはかなわない。

|
E
N
D
|

番外編 「出会いは橋の下で」 (後書き)

ここまでお付き合い下さいまして、誠にありがとうございます。

「出会い編」いかがでしたでしょうか？

この後、暁の方でも、番外編を載せられたらと思っています。

できるだけ早めに、とは思っていますので、よろしければ、また、訪ねてみて下さいね。

ありがとうございました。

注) 未成年者の飲酒は、法律で禁止されています。この話はあくまでフィクションなので、お酒は20歳になってからにしましょうね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9872f/>

彼女の恋愛事情2 ～麻由の場合～

2010年10月11日01時06分発行